

---

# 満足なエルフィン

海亀みるら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

満足なエルフィン

### 【Nコード】

N7059T

### 【作者名】

海亀みるら

### 【あらすじ】

何故、人の肉を食べる事が現代において忌避されているのか？

何故、家畜の肉を食べる事が忌避されていないのか？

人の姿に似た亜人エルフィンを食用に飼育する農家ガンステイルは、王都の命令により『満足なエルフィン』を育てる事になる。

彼はエルフィンを『満足』にさせるため、『幸せ』にすべきだと考えた。そして、幸せにする手段としてそれを自分の娘として育てる事にした。

翌年の春、国王に献上するために。

食用肉の幸福とは何かを追求する、グロテスク・ライトファンタジ  
ィ。

この作品は第6回スーパーダッシュ小説新人賞に投稿した作品を  
加筆修正したものです。

## 第0話 饗宴

### 第0話 饗宴

夜の闇を打ち消すかのような無数の松明の灯火が、煉瓦の町並みを朱く染める夜。

十日にも及ぶ祭典を経てなお、人々の熱気は冷め遣らない。むしろ日に増して加熱する勢いであった。

オムニバル。狂食祭と名付けられたこの宴も十日目を迎えてやつとメインイベントへと運ばれることとなった。

開かれた庭園を訪れた者は皆、テールいっばいに盛り付けられた料理を眺めたまま垂涎している。誰もが、今にも肉に飛び付かばかりの勢いを抑えながら開式の辞を待っているのだ。

やがて屋敷のバルコニーに男が現れた。この土地の権力者であることは、そのいかにも荘厳な佇まいからも想像に難くない。

早く喰わせる。男に集中する視線はどれもそう語っていた。

男は今宵の食材を引き連れて民衆がよく見える位置へと一歩前に出た。それはつまり民衆からも彼の姿がよく見えるということでもある。

「我らは」

男は唐突に口を開いた。

「古代種が抱えた罪と罰をすべて乗り越え、今ここにいる」

それは何度も繰り返されてきた文言である。オムニバルの歴史を語ることで人々の日用の糧に感謝するという意味が込められている。「かつて人々はその生命を育み永らえる為、故人の知恵と勇気と力を得る為、権力を継承する為、愛する者との別れを惜しむ為、共に人肉を喰らい、そうして歴史を紡いできた」

力強く、男は唱える。

「我らは何故、同種である人の肉を渴望したのか。海を隔てた大陸の賢者でさえ、その解を求めることはできないだろう。だがしかし、我らの喉の渴きを満足させるのは常に人の肉であった。時に我らは人の肉を喰らうため国を滅ぼし、時に我らは人の肉を喰らうため死者の墓を暴き、時に我らは人の肉を喰らうために子を産み育てた。それが罪」

男は拳を強く握る。しかしそれに気付くほどの者もない。

「だが、人の肉を食した者の肉は、我らにとって猛毒となりえた。そう、共食いを重ねることで不治の病であるジク病に常に蝕まれてきた。それが罰」

男の演説を誰も聞いていない。聞いているとすれば、彼の隣にいる食材ぐらいであろう。

男はさらに続ける。

「しかし、神は我らに救いの手を差し伸べた。そう、エルフィンの発見である。エルフィンは我らに未来を与えた。食糧問題、それによる戦争、そしてジク病。これらすべてをエルフィンはその血肉を以て我らから遠ざけたのである。彼らは幸いにも我らと同じ存在であった。稀少種族であるがゆえ、我らよりも遙かに高い知能を持ちながらも飢えと共食いにより血筋を途絶えようとしていた。そこで我ら人間の祖先と彼らエルフィンの祖先は契約を結んだのだ。誇り高き彼らの血統を永らえさせてその数を増やすことを条件に、彼らは我らに血肉を捧げると。

それ以来我々はエルフィンの恩恵を忘れる事がないように毎年の春にオムニバルを始めたのだ。ここに集った諸君も毎年この季節にはエルフィンを食している事だろう。今や共食いによる滅亡の危機は消え失せた。さあ、諸君。ともに祝おう。そして感謝しよう。神からの授かり物であるエルフィンを大いに喰らおう」

男は熱く拳を天に突き上げた。

そしてそれが合図となった。

人々はいつせいにエルフィンの肉にむしゃぶりついた。

庭園はエルフィンの鳴き声で満たされた。

バルコニーの男は階下の狂乱を眺めたが、食欲に狂う民衆たちの姿など面白くも無かった。

視線を横にずらす。彼の隣に立つエルフィンは眼前に広がる狂気を、涙を湛えた瞳で見つめている。彼に粗相がないようにと震える足をおさえながらしつかりと両脚で立っている。外見から推測される齡は、人間にしておよそ十五ぐらいだろう。気丈に振る舞っているようだが、人間のものとは明らかに異なる細く長く尖った耳が恐怖によって伏せられていた。

自分の状況をわきまえた、すばらしいエルフィンではないか。

彼がそのエルフィンの肩に手を置き、見つめあつた時間は二秒。

よく潤った両目から美味しく戴くことにした。

## 第1話 父娘 1 - 1

### 第1話 父娘おやこ

「素晴らしい」

品評会の委員は彼女を見るなりそう言った。

いや、彼女と言うのは正確ではない。『それ』は品評会にとって食材でしかないのだから。

「褐色肌に白毛、瞳は紅。毛並みも良く、引き締まった体をしている」

品評会の者は恐らくエルフィンを見ただけでその味が判るのである。先程から喉を鳴らして『それ』を見定めている。

応接室にいるのは三人。エルフィンも人数に加えるならば四人であった。品評会の委員を務めるイルストル卿。その従者。褐色肌の裸体をさらすエルフィン。そしてこの屋敷の主であり、そのエルフィンの所有者であるガンステイル・ビノシエ。

イルストル卿は王都から派遣された品評会の委員であった。来年のオムニバルで国王に献上するエルフィンを探しに来たという。

オムニバルといえばこの国の主要な祭典の一つであり、つい先日終わったばかりである。ガンステイルいるガーベント領でももちろん催した為、余分なエルフィンの在庫など底をついている事ぐらい王都でも把握しているはず。何故わざわざ辺境の地にまで、たかがエルフィンを探しに来たのであろうか。ガンステイルは注意深くイルストル卿を見張った。

ガンステイルの疑念など意に介さず、イルストル卿はエルフィンをさらに嘗め回すかのようにじっくりと眺めた。彼の従者も同様にエルフィンを眺めているが、その視線は食欲というよりは性欲に満ちたものであった。ごく稀にエルフィンに対しても劣情を催す者

が、その事はガンスティールもよく知っていた。だがその従者の厭らしい視線に彼は気分が悪くなった。

「少々痩せ過ぎのようですな。来年のオムニバルまでに良く肥えさせておけばよろしいでしょう。王は、恐れ多くも大食であらせられるからな」

ハハハと乾いた笑いをして、イルストル卿はようやくエルフィンから目を離した。

「ガンスティール殿も人が悪い。これほどのエルフィンの後生大事にとっておくお積もりでしたかな。繁殖用にするには惜しいですよ」  
そこでイルストル卿はベロリと舌なめずりをして言った。

「美しいエルフィンは我々に食べられる為にいるということをお忘れなく」

では御機嫌ようと彼は従者を連れて足早に応接室を出て行った。

部屋の中にはエルフィンと主人だけが残った。

エルフィンは始めから終わりまで何も言わず、ただ呆然と立っていた。

ガンスティールも終始無言であった。イルストル卿と従者が屋敷から出たのを応接室の窓から見届けてから、彼は彼女の白いボサボサの髪を撫でた。他のエルフィンにも行うような、家畜への優しさに満ちた愛撫であった。

彼女の表情が明るく輝いた事など彼は気づくはずも無かった。

ここで、この物語の舞台と背景についていくつか御説明しよう。

ガンスティールが経営するエルフィン養殖場『ビノシエ農場』の敷地内にある私邸、この屋敷は地元の山村から離れた山奥にある。不意の侵入者を拒むように、屋敷と農場は巨大な鉄柵に囲まれている。村から峠に向かって山道を行き、森の中から突如として現れる二本の巨柱が正門である。赤煉瓦を積み上げて出来たそれはビノシエ家初代から伝わる門柱だという。門柱の間には鉄格子の扉。扉越しには屋敷しか見えない。そこが農場だと知らぬ者からは、広い中

庭を持つ邸宅にしか見えないだろう。だがその邸宅の裏にはさらに広大な敷地があり、そして遙か遠方にエルフィン舎がある。

ビノシエ家は国内でも有数のエルフィン畜産農家である。エルフィンの養殖には相応の知識と土地と財力が必要不可欠であるため、ガンステイルの『ビノシエ家』もそれなりの家柄であるといえよう。また、彼の家は領主マハエルの治めるガーベント領の中でも古くから続く農業貴族であり、彼自身も領地内の同業者の間では名の知れた男であった。

農業貴族とは、特定の農業を営むために広大な土地を占有する事を認められた者への呼称である。土地を専有することが認められたのは貴族だけだという王都の意向により、敷地面積が一定以上の農家には貴族の称号が与えられていたのだ。王都を除いて封建社会が廃れた今となつては貴族という身分も形骸化していたが。

ガンステイルは成人した時点で農業貴族としての権利と農場を継いだ。彼の父親は畜産業に興味を失つたようで、彼の成人を機にガーベント城下町で活動写真館の経営を始めたとのことだった。彼の父親によればこの頃は大衆娯楽に人々の関心が高まっているという。生活水準のレベルが高くなつてきたことで娯楽のために浪費する余裕が民衆の間に生じているためだった。

それでもいまだに、ガーベント領の主な産業はエルフィンの養殖とその飼料となる穀物の栽培であった。近年ではエルフィンの飼料には魚肉が良いという評判があるがガーベント領は山に囲まれ海を持たない。その為、つい最近になってこの領地はやっと近隣との交易を本格的に始めた。ガーベントにおいては、近隣領との文化交流により産業の発展が加速している。

このウェルトウム王国は、王都オルパスを中心として大陸ウェルトウム全土にわたる統一国家であった。しかし、国王アラクトはオルパスにのみ君臨し、それぞれの国家の元王を領主として据えて自治を認めていたので事実上は連合国家であるともいえた。近年は産業の発展に伴い人々の思想は絶対王権を尊重するものから離れてい

る。昨今の風潮である民主主義に馴染めない者だけが王都オルパスで封建主義の真似事を続けている。

この大陸全土に共通する風習のひとつが、エルフィンの養殖とその食用である。エルフィンとは、野生ではウエルトゥム山間部に生息していた二足歩行の哺乳類であり、知能が発達し両前足で道具を使うという特徴を持っていた。外見は人間に酷似しているものの、耳が極端に細く長く尖っているため、幻想小説に登場する亜人の名称にちなんでエルフィンと名付けられたと歴史書には記述されている。

現在では全てのエルフィンが養殖であると言われている。養殖場からはぐれたエルフィンが出る事もあったが、そういったものは生き延びることがまず無い。森に入れば野犬に食われ、町に出れば人に食われるからである。人々が口にするエルフィン肉はよほどのことがない限り畜産農家の下で育成された養殖のものである。

エルフィン肉は大陸ウエルトゥムでは主に慶事にのみ用いられる特殊な食用肉とされているがその育成は容易ではなく費用もかかる。整った環境で育てられればより上質の食肉になると言われるため、限定された地域で養殖されるのが常である。

ビノシエ農場での徹底した管理飼育は上品なエルフィンを生むと評され、特に上流の貴族に好評である。近隣の領地からわざわざこの農場にエルフィンを注文しに来る者もいるほどだ。事実、半年前に行われたオムニバルの際も近隣の貴族から多くの注文を受けた。これがこの物語の舞台とそれを構成する諸々である。

品評会のイラストル卿が帰った後、ガンスティールは応接室に残ったままひとしきり思索した。

応接室の中には彼と、褐色の裸体を晒すエルフィンの雌がいる。彼女は見知らぬ男たちがいなくなつて緊張が解けたのか、興味深そうに部屋の中をキョロキョロと見回している。

ガンスティールはこれまで何頭ものエルフィンを飼育してきたた

め、エルフィンにもそれぞれ人間でいうところの「性格」のようなものがあると知っている。その中でも彼女は特に好奇心が旺盛なようだと感じた。

彼はまた、品評会の者の言動を思い返す。随分と反応が良かった。好感を持たれた事は間違いないと彼は思った。彼は国王というものに忠節を感じてはいなかったが、権力者の式典に自分の農場のエルフィンを献上することが大きな宣伝効果になるだろうとは思いい、それを大いに期待した。品評会から一時的に大きな報酬も出るだろうと欲も出た。

今ここにいる識別番号7741326番のエルフィンはもともと繁殖用にするつもりだったが、この好機の為であれば出荷用に回しても構わないと彼は考えた。

胸の内に打算的な喜びを秘めて、ガンステイルは目の前のエルフィンの頭をもう一度撫でた。

その表情がわずかに曇った事など彼は気づくはずも無かった。

## 第1話 父娘 1 - 2

品評会の訪問から二週間後、王都からの便りが届いた。

その日ガンスティールは、今はこの屋敷にいないかつての恋人の部屋で肖像画を眺めていた。

絵心の無いガンスティールがその恋人にせがまれて描いた物だった。彼自身は良く出来ていると思ったが、屋敷の給仕も執事も苦笑しながら傑作だとその絵を褒めたものだった。ガンスティールが成人する前、十余年前に描いたものだ。その恋人を失って以来、彼は時折この絵を眺めては当時の記憶を辿る。

空想に耽る彼の肩を、ふいに誰かが叩いた。屋敷の中で最も高齡である給仕エメトだった。

「何だ」

「旦那さま。何度もお呼びしたのですがお気づきになられなかったので失礼いたしました」

エメトは、穏やかな笑みが顔に張り付いたような高齡の女性だ。

ガンスティールの父親の代からこの屋敷に仕えている。彼女はガンスティールが眺めている絵を見ても表情は変えなかった。

「伝令役が来ているようです。ご確認ください」

彼女はただ用件を伝えただけだったが、言外にガンスティールを咎めていた。かつての恋人に心を奪われたまま妻を娶ろうとしない彼を責めているのだと周りの者は言った。彼女は彼が元恋人の部屋にいるときだけは機嫌が悪い。それ以外の時には外見通りに穏やかな老婆だった。

「ああ。分かった」

ガンスティールは居心地が悪くなり部屋を出た。廊下の窓から外を見下ろすと、ビノシエ邸の正門の鉄柵前に二頭立ての蜥蜴車が止まっている。そしてよく見れば、格子扉の前に小さな人影がある。呼び鈴を鳴らす様子もなくただその人影は立っている。それが当然

であるかのように、ほとんど動かずにその人影は正門の前にいる。まるでこちらが気付くのを待っているかのようにだとガンスティールは思う。

確かにあれが伝令役のようだと理解し、ガンスティールは正門に向かう。廊下から屋敷中央の階段を降り、一階の玄関から出て庭を横切り、正門までゆっくり歩いて二分でたどり着く。

たどり着いたところで、その伝令役がまだ成人していない程の若い少年であると気づく。やけに気取った服装が不自然に感じられる。仕事上のみ着用する貸衣装なのだろう。格子扉越しに見るとその顔は少し垢で汚れている。注意深く観察するガンスティールの視線にも物怖じせずに、伝令役の少年は無感動に立ちつくしていた。

そしてその少年は、しっかりと伝令役としての仕事をこなして帰っていった。

伝令役とは辺境の貴族へ国王の意図を伝えるための役職のことである。彼らは貴族の邸宅を訪問しても、その敷地内に入ることはない。身分が違うと教えられているためである。ガンスティールのもとへ来た伝令役もその通りであった。だからガンスティールは彼の給仕の報告を受けて伝令役の訪問を知ったときも、部屋に通すことなく彼自身が正門まで出向いたのだった。

ガンスティールが正門の格子を開き伝令役と対面すると、その伝令役の少年は肩にかけた鞆からうやうやしく手紙を取り出した。白い肌のエルフィンの背中から剥ぎ取った皮膚を乾燥させて作った高級な皮紙ヴェラムだった。その手紙は決して手渡されることはない。伝令役がその場で読むからだ。

伝令役はその手紙の内容を、一字一句に時間をかけて独特のイントネーションで読み上げていく。読み上げられた文章もまた特殊な文法で書かれている。

これは、その文法をしっかりと教育された貴族にしか理解できないようにと考案された風習であった。貴族と平民の明確な差別化という意図によるものである。これは現国王アラクトの治世になるよ

りもさらに以前からの根強い貴族思想を象徴していた。今と成つては貴族と平民の違いも希薄となつてゐるため、多くの者には面倒な風習だとして認識されてゐない。

この奇怪な風習のために、伝令役が来た時には必ず自分で聞きに行かなければならなかつた。ガンスティールの屋敷の中にその貴族語が正確に理解できる者がいなくなつたからだ。

たつぷりと時間をかけて手紙を読み上げると、伝令役は手紙を差し出してきた。受け渡すためではない。その手紙がしっかりと役目を果たしたことを証明するためにサインを求めているのだ。

ガンスティールは指に黒インクをつけて器用に自分のサインを書いた。乾燥したエルフィン of 皮膚の感触がインク越しに伝わつた。

伝令役はサインを確認し、嬉しそうにそれを鞆にしまつて歸つていった。恐らく伝令役は文字の読み方だけを習得しているのだろう、手紙の内容には無関心の様子であつた。

ガンスティールは屋敷の自室に戻り、今しがたの手紙の内容を思い返した。

「満足なエルフィン、か」

不可解である。彼には王都の意図が理解できなかつた。

手紙は、国王からガンスティールに宛てられた物ではなく、聖誕祭の準備会からの物であつた。

その内容は、要約すればこのような事である。

『来年度に王都で開かれるオムニバルでは国王の聖誕祭を兼ねる事になつた。そこで、国王に献上するエルフィンには最上級のものを用意したいと準備会は考へてゐる。』

ガンスティールのビノシエ農場で育成されたエルフィンは貴族にも評判であるという話は前々から聞いていたので、品評会の委員を遣わして品質を確かめさせた。

報告によれば、特に質の高いエルフィンが一頭いるようなので、今後一年間はそのエルフィンの育成に力を注ぐように。王都からは

助成金を出すので余力を惜しむな。

ある美食家の話では、エルフィン是我ら人間と同じく感情を持ち、その肉を食した者にエルフィンの感情が伝わるといふ。それを聞いた国王はエルフィン肉によって満足感を得たいと望んでいる。

そこで準備会では国王に「満足なエルフィン」という名で料理を献上することにした。

『 聖誕祭までに例の褐色肌のエルフィンを満足させ飼育するように』と。

ガンスティールはその手紙の内容を把握したとき、呆れるほかなかった。

エルフィン農場を経営する彼でさえ、エルフィン肉を食べた者に感情が伝わるという話を聞いたことが無かった。

もしそれが本当であれば、毎年のオムニバルの後に人々はどのような感情を得るだろうかとガンスティールは空想する。そして、恐らく絶望と恐怖のどちらかだろうと結論付ける。一般に広くは認識されていないが、エルフィンは確かに感情を持っている。しかも人間と同じ程度に豊かな感情をだ。自らの死を悟れば絶望もするし、痛みには恐怖感を覚えるだろう。

また、満足なエルフィンという言葉がどれほど残酷なことかと落胆した。エルフィンはすべて満足になれないとガンスティールは考えている。ガンスティールはこれまでに数え切れないほどのエルフィンを育ててきた。だから判る。彼らは食われるために生まれているのだと。

もちろんガンスティールは、せめて生きているうちは悲しませないようにと出来るだけ愛情を注いでエルフィンを育ててきたつもりだ。

エルフィンの飼育に手間をかける農場は少ない。多くのエルフィン農家は、小さな施設の中に詰め込むだけ詰め込んで、定期的に餌を与えるだけだ。その施設からは常に悪臭が漂い、不衛生なこと極

まりない。また、そういった乱雑な農家では精肉する際も意図的に即死させるということを行っていない。もともと知能の高いと言われるエルフィンのは多くは、自分の死を悟ったときに出来る限りの反抗をして息絶えていくものだった。中には損傷が激しく食肉にすらなれないものもいるという。

一方ガンステイルは、自分の農場で精肉する場合においては、なるべくエルフィンらに恐怖を与えぬよう一頭ずつ速やかに屠畜する様に心がけていた。彼の農場のエルフィン肉が美味であると評判なのは、その肉に「苦痛」といった雑味がないためかもしれない。

稀に生きたままのエルフィンを出荷することもあったが、その後のエルフィンがどうなるかをガンステイルは追及しなかった。

いずれにしても、エルフィンは「満足」という感情を持たないはずだった。彼らはそういった感情を得ることなく死が与えられるのだから。それが彼の持論であった。

そんな彼の思惑も、他の者には通じないのだろう。

ガンステイル自身もエルフィンを食べて生きてきた。エルフィン食文化の恩恵を受け、その中にいる以上、彼はエルフィンを食べることを否定はしない。

しかし、エルフィンにとっての幸福などを考えると自分自身の矛盾に突き当たってしまうので、これまで避けてきた問題だった。

今はそれに向き合わなければならない。

自分は任された仕事を全うするだけ。ガンステイルは自分にそう言い聞かせた。

## 第1話 父娘 1 - 3

王都からの手紙の内容をどのように解釈するかは先送りにして、ガンスティールは行動を開始しようと思いついた。

まず彼は7741326番のエルフィンを応接室に呼び寄せた。品評会に検品された例の牝の褐色肌エルフィンである。

彼女がガンスティールの応接室に入るのは生まれて二度目である。先日見知らぬ男に全身を撫で回された記憶が蘇ったのか、ひどく不安げな表情を浮かべていた。

ガンスティールの農場で飼育されるエルフィンはガンスティール邸から離れたエルフィン舎で飼育されている。エルフィン舎とは言わばエルフィンの共同生活所であり、現在では約五千頭のエルフィンがそこで生活、飼育されている。

この農場のエルフィン舎はガンスティール邸よりもはるかに大きい建造物であり、そして邸宅よりも嚴重に警備されている。脱走するエルフィンを捕らえるためではない。侵入者を防ぐためだ。エルフィンが農場を抜け出したとしても、町を歩けばすぐに捕らえられ食われてしまうだろう。それ以前に、意図的に脱走するという思考を持たないはずだ。それよりも、外部から食肉目当てで進入してきた者が何らかの病原体を持ち込むことのほうが問題であったのだ。

エルフィンは通常、エルフィン舎を出ることはない。なぜなら、そこを出る前に彼らは物言わぬ食材となっているからである。

例外としてエルフィンを施設から出すのは、品種改良の為の交配実験として他の農場へ売る時と、年に二回開催されるエルフィンの品評会に連れて行く時だけである。

そういつた理由から、7741326番のエルフィンもエルフィン舎を出た事がなかった。

彼女は先日の男たちがいないとわかったのか、おとなしくその場に直立していた。

ガンスティールは、彼女が彼の視線に気づくまでずっとその肢体を観察した。

年齢は十四年。褐色の肌に白い体毛。瞳は透き通った紅。もともと繁殖用にするつもりだったが、まだ繁殖能力はないようだ。肉付きも良くないが、確かにあと一年あれば十分改善できると彼は考えた。

その姿を見ているうち、ガンスティールは彼女に対して愛情とも親近感ともつかない柔らかな情念を抱いていることに気づいた。

そしてガンスティールは心の中で誓った。彼女を一年間、出来る限りの愛情をかけて育ててやるうじやないか、と。国王に献上するエルフィンとして他に見劣りしない素晴らしいエルフィンに仕立て上げてやれば、彼女自身も満足に至るだろうと確信したからだ。

このエルフィンを特別なものにするには、やはり他のエルフィンから隔離し自分の手元で飼育するのが良いだろうと彼は考えた。

それならばいつそのこと自分の娘同然に接してやれば、きっとこのエルフィンも幸せだろうとも彼は考えた。エルフィンの身でありながら貴族の娘として民衆よりも丁重に扱われる事ほどの幸せはないはずだとの考えだった。

世間ではエルフィンを家庭で飼育することも稀にあった。例えば庶民でも富んだ夫婦などの中には、老いてから子どもを亡くした寂しさを紛らわすために生のエルフィンを丸ごと買って飼う者もいるのだという。そういった者たちは飼っているエルフィンに服を着せたり人間の食事を与えたりして自分の子どものように可愛がるとの事だ。本当の子どもだと思い込んでしまう者もいたようだが。

ガンスティールが7741326番のエルフィンに先ず与えたのは、彼女の名前であった。

「さて、君の名前は何にしようかね」

あくまで独り言としてガンスティールは目の前の彼女に向かって語りかけた。

食用の家畜といえどもエルフィンとは人間と同じ体のつくりをしている。だから、それなりの知能も持っているというのが世間のエルフィンに対する認識だった。

話かければ声に反応して振り向くなどは当然として、つけた名前を何度も呼びかけていればそれを自分の名前と認識する知能はあると知られている。それどころか人間の言葉をいくつか覚えることも可能で、簡単な命令ならば例えば「来い」や「座れ」といった芸も身につくものだった。

エルフィン農家のガンスティールとしてはもちろんその程度の理解はある。

しかし、エルフィンの知能はその程度ではないとガンスティールは実体験として知っていた。

かつてガンスティールが恋したエルフィンは人と同じように言葉を操り、豊かな感情を見せた。肖像画を描いてほしいとせがまれた事もあった。

ガンスティールが回想するその記憶は彼が十六歳の頃までさかのぼる。

その頃、彼の父親クラパウト・ビノシエはエルフィン農家として現役だった。

父親はガンスティール以上にエルフィンへの愛情に溢れた人物だった。彼が思い出す限り、父親は常にエルフィン舎に籠っていた。エルフィンを育てることが彼の父親の人生だった。

彼の父親は休憩時間も常にエルフィンと過ごし、彼らに幻想小説などを読み聞かせていた。ガンスティールはそんな父親を仕事上の師として尊敬していた。

そんな中、ガンスティールは父クラパウトが育てたエルフィンに恋をした。

人間の年齢にして十四歳ほどの、褐色肌に白髪というこの農場では最も多く育成している種類のものだった。彼女は、繁殖用として育てられ既に二度の生殖・出産に成功している優秀なエルフィンだ

った。

ガンスティールは赤子を抱く彼女の妖艶な姿に魅入られ、父親に無断で彼女をエルフィン舎から連れ出した。そして、仕事に耽るばかりの父親に愛想をつかして出て行った彼の母親の部屋に匿ったのだった。

ガンスティールと彼女の生活は、彼が十八歳で成人するまで続いた。彼の父親が異常な事態に気づき、二人を引き離したのだった。

淡い回想の途中で、彼はふとある単語を思い出した。

『ユノー』

思い出した、というよりは唐突に頭の中に挿入されたような言葉だった。もしかしたら、その恋人の名前だったかもしれないなどガンスティールは思った。

そして、部屋の中でぼんやりと立っているエルフィンを改めて眺めた。記憶の中の恋人に良く似た姿だと感じられたので、その名前を目の前の少女にも与えることにした。

「よし。君の名前は、今日から『ユノー』だ」

名前を与えられたことが理解できたのか、『ユノー』は口元に薄く笑みを浮かべたようだった。

「ユノー、自分の名前を言ってごらん」

ガンスティールは先刻まで7741326番の繁殖用エルフィンだった少女を自分の近くに呼び寄せて語りかけた。

少女はゆっくりと口を開き、発音を確かめるように一言ずつしっかりと発声した。

「ユ、ノー」

「そう。それが君の名前だ、ユノー」

「ユノー。ユノー。ユノー」

少女、ユノーは自分の名前を覚える為か何度も自分の名前を声に出して言った。こうして7741326番の繁殖用エルフィンには初めて名前が与えられた。

そこでガンスティールは理解する。やはりエルフィンは人の言葉を理解しているし、必要があれば喋る事も出来るのだと。ただ彼らには機会が与えられていないだけなのだ。

自分の思い通りになって気を良くしたガンスティールは、続けて自分の名前も教えた。

「君の名前はユノー。そして、私の名前はガンスティールだ」

ガンスティールはユノーと自分を交互に指差して何度も言い聞かせてみた。すると、やはりユノーはすぐにそれを理解したようだった。

「私の名前はユノー」「あなたの名前はガンスティール」

その様子に、我が意を得たりとガンスティールは大いに喜んだ。だが、違和感を得た為それを訂正することにした。

「ユノー。これから君を私の娘として育てることになった。だから君も私の事は『お父様』と呼ぶように」

彼はこれからの一年間を父娘としてユノーと生活し彼女を育てると決めたのだ。だからお互いに父娘として意識しなければならぬ。彼はそう考えた。

「わかりました、お父様」

物分りの良い人間の少女であるかのように、ユノーはごく自然にそう返事をした。

## 第1話 父娘 1 - 4

そしてガンスティールは娘としてユノーを見たときに真つ先に気づかなければならないことを、いまさらのように気が付いた。

それは、服を着ていない事。

ユノーをエルフィンとして見れば、服を着ていないことなど当然であり意識もしなかった事だ。

しかし自分の娘が全裸で応接室にいると考えれば、それは酷く不自然なことであった。

そこでガンスティールは次に、服を与えることにした。

応接室の呼び鈴を鳴らすと十秒で給仕がやってきた。この屋敷で働く給仕の中でも最も若い十七歳の給仕、シエンレイだった。

「いかながなさいましたか、旦那さま」

彼女は白と黒を基調にした、給仕用の制服を着ていた。

自分の娘に給仕の服を着せることを思いとどまると、ガンスティールは給仕に服を持ってくるように頼んだ。給仕はそれをすぐに了承し、部屋を出た。

約二百六十秒後に給仕が戻ってきた。給仕はガンスティールの普段着のハンガーを丸ごと持ってきた。

ユノーに与える服と伝えなかったのがいけなかったようだが、たしかにその給仕からすれば、今現在の応接室の中に服を着る者としては主人であるガンスティール以外に考えられなかったであろう。かといって裸で放置するわけにもいかない。とりあえずは今、与えるべき服を考えなければならない。

ガンスティールはユノーに、彼の普段着を着るよう命じた。

ユノーには服の着かたを教えたことがない。だから服を与えただけでは着ることもできないはずだったが、ガンスティールはそれにはしばらく気付かなかった。

そこで彼は再び給仕を呼び、ガンスティールの服をユノーに着させた。

その作業をさせられながらも給仕は終始不可解な顔をしていた。これから一年間のことを思うと、彼は自分の屋敷の中の人間に対してだけでもしっかりとユノーのことを伝えなければならぬと思つた。

彼の屋敷で働く者は、農場やエルフィン舎の内部事情などには詳しくないだろう。実際、屋敷とエルフィン舎を行き来する給仕も警備員もほとんどいないはずだつた。

今後はユノーも屋敷の中で生活することになるのだから、一度紹介しておいたほうがいいのは確かであつた。

ユノーに服を着せ終えて給仕が出て行ったところで、ガンスティールは再び気が付いた。

「ユノーに部屋を与えなくては」と。

「この屋敷で生活するとして、まずは今夜寝るための部屋を用意しなければならぬではないか」

窓の外を見ればもう日も沈んでいる。

ユノーが娘であるならばエルフィン舎に帰すという訳にもいかない。

ガンスティールは給仕に屋敷内の空き部屋を探させ、ユノーの部屋を確保した。

ユノーの部屋としてあてがわれたのは、ガンスティールのかつての恋人の部屋であつた。

彼とユノーがその部屋に辿り着くころにはしっかりと部屋の中が掃除されていた。彼が描いた肖像画は屋根裏の物置に片付けられたようだつた。

何かあつたら呼ぶようにと部屋の呼び鈴を示し、ユノーをその部屋に置いてガンスティールは彼の自室に戻つた。

こうして、ユノーには初めて私室が与えられた。

しかし自室に戻り一息つく間も無く、ユノーの部屋から狂つたよ

うに呼び鈴が鳴らされた。

呼び鈴が珍しいので何度も試しているのだろうと思い、彼はあまり気にしないことにした。

しかし呼び鈴が鳴り終わってしばらくすると、すごい勢いで給仕が彼の部屋に飛び込んだ。

「旦那さま、先程のエルフィンが……」

まだ自分に思い至らないことがどれだけあるのだろう。彼はそう思いながらユノーの部屋へ急いだ。

第1話 父娘 1 - 5

ユノーの部屋の前には数人の給仕がいた。

しかし彼女らはどうすればよいのか分からない様子で、ただ落ち着きなく互いの顔を見回すだけであった。開放された扉を覗き込んででは困惑していた。

「何があった」

ガンスティールはそう言ったが、部屋に近づいただけで何が起きたかは気付いた。

廊下まで異臭が漂っていたが特に慌てることもなく、彼はユノーの部屋に入った。

下半身を着衣のまま汚物で汚し、放心状態で部屋の隅にうずくまるユノーの姿があった。

失敗だったとガンスティールは落胆した。

ユノーが服を着る方法を知らなかったのであれば服を脱ぐ方法も分からないのだと、彼はそれにすら気付かなかった自分を恥じた。

そもそも、排泄とその処理にしても人間とエルフィンでは違うではないか。

ガンスティールはとりあえず一人の給仕に指示を出し、ユノーの体を洗浄することに、いや、入浴させることにした。

残る二人の給仕にはユノーの部屋を掃除させながら、彼はその異臭のする部屋の中で深く考えた。

まず、エルフィン舎では『ウォーターポッド』と呼ばれる排使用の容器があり毎日三回それを回収し洗浄していた。ならばこの部屋にもそれを置くべきか。

「違う、そうじゃない」ガンスティールはすぐに自分の考えを改める。

ユノーは人間ということになっているのだからこの屋敷のルールに従ってもらうしかない。

屋敷では、二階建てになっているうち一階部分にのみ排使用の個室がある。下水につながっている、いわゆる『水洗トイレ』だ。彼女が風呂から出たらまず、服の着方と脱ぎ方と、水洗トイレの使い方を教えなければならぬ。そう思いながらガンスティールは部屋の真ん中で、掃除する給仕たちをしばらく眺めていた。

ユノーの入浴が終わるとガンスティールは屋敷で働く者を集め、ユノーに関する事の次第を説明せざるを得なかった。

給仕が四人、執事が一人、料理人が一人、主人であるガンスティールとその娘となったユノーを含めた八人が書齋に集められた。

説明を終えて、集められた者の顔を一人ひとり見回す。歓迎する者はいない様だった。

呆れながらも、諦めている。そういった表情を隠すことなく彼らはガンスティールに視線を返す。

彼らから見ればユノーが屋敷に住むことは、着飾られた家畜が歩き回ると同じであろう。

ガンスティールにとってそれは、ある程度は予想されたことではあった。

しかし彼らは反発しない。

あくまで主人の意向に従うまでである。

明日から一応は『主人の娘』としてユノーを扱ってくれることだろう。

説明が終わり解散させ、ユノーをつれてガンスティールも書齋を出る事にした。

思えば慌ただしい一日であった。もうすでに日も落ちている。

若い給仕の私服を譲り受けて着飾られたユノーは、その尖った耳さえ見えなければ人間の少女と何ら変わり無かった。

説明が終わり、全員外に出たと思ったら、給仕のエメトが誰もいない書齋に残った。ガンスティールが彼女を連れ出そうと中に入る

と、彼女は「話がございます」と告げ、ガンスティールの後ろに回って書斎の扉を閉めた。

「話とは、何だ」

ガンスティールは、エメトがユノーに対する文句を言うのだろうと身構えた。しかし給仕は文句など言わなかった。

「単刀直入に申し上げます。旦那さま、あの少女はエルフィンです。人間ではありません。ですから私はあれを人間としては扱えません」  
エメトは叱られる事を覚悟でそういったようだった。一方のガンスティールは余りに怒りが激しすぎて逆に気の抜けたように、

「君には失望した。君は分かってくれていると思った」と言い、エメトを書斎から追い出した。

私は間違っていない、とガンスティールは心の中でだけ強く念じてから、彼の自室に戻った。

## 第2話 満足 2 - 1

### 第2話 満足

それから一週間後、王都からの使者が来た。

王都からの給金の額は、辺境の下級貴族であるガンスティールには手に余るだけであった。

これは、よほど期待されているのだろうと思わされるものであった。

しかし当初は困惑していたその莫大な給金も、使い道さえ決まっ  
てしまえば後は浪費するだけである。

ガンスティールはその金を余すところなくユノーの一年間の養育  
費に当てる心算であった。

彼がまず思い至ったのは、彼女の食費である。

いまユノーの食卓には溢れんばかりの皿が並べられている。もち  
ろんそこに盛り付けられているのは、普段ガンスティールさえも口  
にしないような高級な食材を丁寧に調理されたものである。

「さあ、お食べ。好きなものだけ食べればいい。食べ切れなかった  
ものは残しておきなさい」

ガンスティールは、テーブルの前で白い前掛けを提げたまま困惑  
するユノーにそう言った。

かつて彼女が口にしていたものと言えば、トウモロコシやムギと  
いった穀物をすりつぶし水で溶いたものであった。

それと比べ今彼女の目の前にあるものは、餌と言えるような物で  
はない。見たこともない甲殻類の蒸し焼き、鉄板の上で脂の音をこ  
もらせる分厚い肉、上品な味のドレッシングがかけられた根菜の炒  
め物など、どれも強烈な匂いを放つものばかりであった。

ただし今のユノーにとってはそのどれもが食欲をそえられるもの

ではない様子だった。それは彼女がまだ味覚を楽しませる喜びを知らないからであろう。

目の前の豪華な食卓も彼女にとっては、変わった形状の餌だしか見えなかった。

しかしユノーは食べる。ガンスティールに、父に食べるように言われたからである。

先ほど教えられたナイフとフォークの持ち方のおりに、最も手前であったステーキから食べ始めた。右手にナイフ、左手にフォークを逆手にとり、肉片の左側から切り分けて食べる。

数種類の野菜を煮込んで作られたソースが肉の味をごまかしていたため、彼女は気づかなかつた。この食卓のステーキ、ハンバーグなどは、ビノシエ農場で精肉したばかりの新鮮なエルフィン肉が使用されているということ。

この食卓にある料理にもかつて生命としての姿があつたのだということさえ、このときユノーは気づくことができなかつた。

ユノーにとって異常な、あるいはガンスティールにとって裕福な食卓が二週間も続けば、ユノーはその食事という名の労働でのコツを掴んでいた。

彼女は刺激的な匂いのするものから、勢いよく頼張る。そして次々と皿を変えては麦酒を飲み、ブドウ酒を飲み、さも嬉しそうに微笑む。

おいしくて微笑むのではない。食欲が満たされて微笑むのではない。そうする事で父が喜ぶからである。

そうしてなるべく多くの皿に手を付け、食べられなくなつたらナイフとフォークを置く。

時には、身動きするだけで気分が悪くなる事もあつた。

それでもユノーは一日二回の食事を満面の笑みで食べ続けた。

そうする事で父が喜ぶと知つたからだ。

ガンスティールはユノーがエルフィンである事を記憶から排除し

てしまったかのようで、ユノーの食卓を眺めては喜んだ。

ユノーがエルフィン肉の料理を食べている様を見ても、共食いであるとは気付きもしなかった。

狂気の食卓は、それが狂気と気付かれぬまま続いていった。

ガンスティールのユノーに対する施しは、食事に限った事ではなかった。

王都からの給金は、一人の少女の食費としてだけでは使い切ることも出来ないであろう額であつたから。

だから彼はユノーに対し、金で買える物は全て与えようとした。与えるという事が彼女を満足にさせると信じたからである。そして実際に、ただそれをしただけだつた。

彼がユノーに与えた物を数えるならばそれは限りなく多かつたと言えない。全てはガンスティールの気まぐれで決定された。

ある時は思いつきで宝石を買い与えた。彼女の全身に宝石つきの装飾を施してみたが、ユノーがその価値を把握できずにいたのでやめた。

ある時は思いつきで書物を与えた。これはユノーが気に入つたためしばらく続いたが、読みきれない本をユノーが持て余す様を見てガンスティールはもう十分と判断した。

ある時は人形を与えた。見向きもされず床に放置されていた為、もう二度と買わなかつた。

ある時は小さなトカゲをペットとして与えた。

それらの全てはガンスティールが実感できるほどの成果を上げなかつた。

## 第2話 満足 2 - 2

そしてこれもまたある時の話、『満足なエルフィン』の伝令が来てから五カ月後のこと。

ガンスティールはユノーに服を与える事を思いついた。

彼の屋敷を訪ねる貴婦人の娘たちが色とりどりの服に身を包んでいる事に気付いたからである。

ガンスティールは幼い頃から畜産農場の経営にばかり携わっていたので、ユノーほどの年頃の人間の少女がどういった服装を日ごろしているのかなど見当もつかなかった。農家の組合に出席する事もあったがそういった場所に集まるのはいつも成人ばかりであった。農業組合の会合に出る事もあったが、そこに集まる少女と言えば品種改良のために連れてこられたエルフィンの牝であり、服など着ているはずもなかった。

ガンスティールは、ユノーには年頃の人間の少女と同じような喜びを与えたいと思った。もちろんそうする事で彼女が満足すると思っただからである。

はじめに彼はユノーを城下町に連れて行くことにした。彼の屋敷の近くにある山村には大きな服屋が無かったからだ。城下町ならばユノーに合うサイズの服もあるだろう。豪華な服を買ってやりたいという彼なりの親心から、彼は城下町で服を買ってやりたいと思っ

た。だが屋敷の前で馬車に乗せる段階に至って、それを断念せざるを得ない事に気付いた。

「旦那あ、そのちっこいエルフィンは具合が良いんですかい。あつしにも後で貸してくれやせんかねえ」

御者は乗り込んだユノーを見て真つ先にそう言った。ガンスティールにはその言葉の意味するところがまるで分からなかったが、下卑た御者の視線によって気付かされた。

きよとんとするユノーを見て違和感の原因に気付く。浅黒い肌  
白い髪、そして尖った耳という特徴はまさにエルフィンそのもので  
ある。それらは今ユノーが身につける服では隠す事が出来ていない。  
恐らく御者はガンスティールがユノーを愛玩用として連れまわし  
ているのだらうと思ったようだった。

ひどく気分を害され、ガンスティールはまだ少しも進まぬうちに  
馬車を降りた。

その御者が悪いというわけではない。一般的な視点ではそう受け  
取られるのが当たり前だった。

つまり、城下町ほどの大きな町に行けば行くほど、ガンスティ  
ールとユノーを奇異の目で見る者が増えるという事になる。自分がそ  
れに耐えることは出来ないだらうと彼は思った。

ガンスティールはユノーを連れて屋敷へ戻る。

そしてそのまま彼女を自室に連れ込んで、向かい合う。

ユノーはただ虚ろに立ち尽くしていた。ガンスティールの次の行  
動を伺っているようにも見えた。

ガンスティールは洋服棚から手頃な布を取り出してユノーにかぶ  
せてみた。

しかしその布は彼女の耳を隠す事はなく、ただ左右にある突起を  
包むだけだった。

これだけではどうにも、ユノーがエルフィンである事をごまかす  
事は出来そうにない。

そこで彼はまず、彼女に外出用の服を作らなければならないと考  
えた。

彼の思考の不自然さについて彼は自覚せず、ガンスティールは彼  
女を連れて外を出歩くのは諦め、地元の山村の仕立屋を屋敷に呼ぶ  
事にした。

仕立屋は初老の女だった。

普段着として古い緑色のカーテンを縫って作らせた服を着たユノ

「を見て「あら、かわいい」と軽く微笑んだ。そしてユノーの白い頭毛を丁寧にすいた。

その動作はごく自然であった。まるで人間の少女に接するかのよう  
にユノーの頭を撫でる様子に、ガンステイルは戸惑った。人間  
とエルフィンに違いは無いと言外に示しているかのようだった。

ガンステイルもユノーを自分の娘として、人間として接してき  
たはずである。

人間とエルフィンを分け隔てない仕立屋を、ガンステイルは妬  
ましく思った。自分がそれを出来ていないことを認識させられたか  
らだ。

「さてさて、お嬢ちゃんは何色が好きなのかねえ」

仕立屋は独り言を言いながら定規を取り出した。

「好きな色、ですか」自分が問われたと思い、ユノーが答えた。「  
ありません、どの色が好きと考えた事も」

ガンステイルに教えられたとおり、ユノーは訊ねられた事には  
正直に答えた。

だが独り言に返事を貰ったことに驚き、仕立屋は長い定規を取り  
落とした。そしてユノーに顔を近づけて何度も眺めなおした。

「あれまあ、旦那さま。このエルフィン喋れるのねえ」

仕立屋はしばらくユノーを眺め回したが、好奇の目にさらされる  
のを嫌うユノーの様子にはすぐに気付いたようで、慌てて視線をそ  
らした。

「まあまあ、それじゃまるで本当の親子みたいで良いわねえ」

うんうんとゆっくり大きく首を縦に振って仕立屋はにつこりと、  
今度はガンステイルを見た。

その言葉は彼の胸に深く響いた。ガンステイルとユノーは本当  
の親子ではないこと、人間とエルフィンという違う種族であること  
を改めて認識させられる言葉だと彼には聞こえた。

押し黙り考え込むガンステイルをよそに、仕立屋は手際よくユ  
ノーの服を作っていた。



## 第2話 満足 2 - 3

「本当によくお似合いだと思います」

ガンスティールに仕える高齢の給仕エメトは、新しい服を着たユニーを見せられてそう感想を述べた。

先日の仕立屋が作った服は、緑色の簡素なドレスだった。季節が夏の盛りという事もあって通気性の良い涼しげなつくりになっていた。

そのドレスは採寸した時にサンプルとして作られたものである。採った寸法を元にして他に数着の服を作るようにも頼んでいた。それらは一月後にはまた届くことになっていた。

しかしユニーは緑のドレスが気に入ったようで、鏡に映る自分の姿を何時間も飽きずに眺めていた。

鏡に見とれるユニーを見ながらガンスティールは仕立屋の言葉を思い出していた。

「まるで本当の親子みたい」と言われたときの事である。

子どもの代わりにエルフィンを飼う老夫婦と大差ないという意味であつたらうか。

父娘として暮らすようになって既に五ヶ月、傍目にも本当の親子と見紛う程に自分たちは親密になれたはずだとガンスティールは思っていた。そのはずである。ガンスティールは思いつく限りの事をすべてユニーに施してきたつもりだったのだから。

ユニーも近頃は、ガンスティールから何かを与えられるたびに満面の笑みで喜びを表現するようになっていた。

ガンスティールはすっかり気を良くし、今まで一度も聞かなかつた事を初めてユニーに訊ねた。

「さあ、ユニー。何か次に欲しい物はあるかい」

訊かれてすぐにユニーは鏡を見るのをやめ、真っ直ぐに立ってガンスティールを見た。そしてたつた数瞬の後にこう答えた。

「ありません、お父様。私は物を欲しいと思った事ありません」  
ユノーはごく当然のことを答えただけだった。

しかしガンスティールにとっては全く理解できない答えだった。  
ガンスティールは何を考えるでもなく狼狽するほか無い。

長い沈黙の後にわずかな落ち着きを取り戻すと、ガンスティールはこれまでの五ヶ月のすべてを思い返してみた。

彼のどの記憶の中でも、ユノーが自ら何かを欲求したことはなかった。そしてまたガンスティールはただひたすらに自分の思いつきのままにユノーに与えるだけだった。何を与えるにしても、ガンスティールはユノーの反応を見るだけで精一杯だった。

ユノーがその場で喜べば気を良くしていた。ユノーが無反応であればすぐに投げ出して、次に何を与えればユノーが喜ぶかを考えていた。そうして次第にユノーは、ガンスティールが何をしても満面の笑みを向けるようになったのではないか。

「そうか、私の半年間は何の意味もなかったのか。ユノーを満足させてなどいなかったのか。これではただ私が一人自己満足していただけではないか。ユノーはただ、私の顔をうかがって反応していただけだったのか。ユノーは喜んでなどいなかったのではないか」  
彼にとって、ユノーを娘のように可愛がり幸せにさせようというのが『彼自身に課した義務』だった。それが出来ていなかったのだという実感が、彼にその胸中を吐露させた。

誰に問うでもなく虚空に向かって投げ出された言葉だったが、返答する声があった。

「いいえ、お父様。私は喜んでいましたよ」

呆然としたまま、ガンスティールは平坦に紡ぎ出される声を聞いた。そしてそれに訊ねた。

「ユノーが喜んだ振りをしなければ私が不機嫌になるからそういった表情をしていたと言うだけの事だろう」

ガンスティールは茫然自失し、声の主がユノーであるとも分からずにそうつぶやいた。

声は再び応える。

「はい、そうです。お父様の機嫌を損ねないように喜びを表現して  
いました」

声は、あくまで平坦に言った。

ガンスティールはもう何も言わなかった。

再び沈黙がガンスティールを包み込んだ。

そして次に長い沈黙を破ったのは、声の方だった。

しかしその声は今までと違い、わずかに声色を孕んでいたものだった。

悲しみと不安によってかすれた声だった。

「でも、嬉しかった。お父様が懸命に私の為に何かをしようとして  
くれていることが、とても」

声は次第に小さくすぼまり、やがて消えた。

混乱する意識の中からガンスティールが目を覚ますと、ユノーは  
瞳をわずかに潤ませていたが、薄く優しく穏やかな笑みを浮かべて  
いた。

ガンスティールは朦朧とする意識の中で、ユノーの本当の表情を  
見た気がした。

彼はそのまま、ユノーの体にすがり恐る恐る抱きしめた。

ユノーは彼女の腰の辺りにあるガンスティールの頭を、子どもを  
あやす母親のような手つきで撫でた。

『私と向き合うことに、怖がらないで』

誰かの声が、ガンスティールの脳裏に響いた。

### 第3話 日常 3 - 1

#### 第3話 日常

次の日の朝、ユノーは自然と目を覚ました。

エルフィン舎ではガンステイルの点検の際に飼育されたエルフィンが起床する。その時間感覚を体が覚えていたようで、ユノーが彼女の自室で目を覚ますのは夜も明けない早朝であった。上半身を起こして彼女が横を向けば、すぐベッドの横の窓から遠くにエルフィン舎の明かりが灯るのがいつも見えた。

屋敷からエルフィン舎へ向かうガンステイルの後姿を窓の影から見送り、夜が明けて帰ってくる姿が見えるまでユノーは一步も動かず窓辺で外を見ていた。窓から見えるものは濃紺から次第に青に変わる空、朝霧がかすんで見える対面の山肌、屋敷よりも大きいが遠くにあるためそれを感じさせないエルフィン舎、侵入者を警戒するため一定間隔でそびえる見張り台。また広大な農場を囲う壁は途中から遠く小さく見えなくなっている。

ガンステイルが屋敷に帰る頃には当然エルフィン舎の中は餌の時間なのだが、ユノーは屋敷にいるため食事の時間が農場の中の彼らより数十分遅れる。

ユノーは栄養を求めて鳴る腹をさすりながら、時間に正確な自分の腹時計を恨めしく思った。

そしてぼんやりと景色を眺めながら、ガンステイルのことを思い出してユノーはその時感じた愛おしさを心の中で反芻した。

ガンステイルの思惑があくまで職務上の責任感から生じた物であったことをユノーはこの時まだ把握できていなかったが、ユノーにとっては『自分を特別な物として気にかけてくれる』というガンステイルの姿がただ嬉しかった。今までエルフィン舎で飼育され

ていた時にはただの消耗品としての一生が運命付けられていた。同じ場所で飼育されている他のエルフィンと同価値の無個性として扱われていた自分が、唯一の物として扱われる。それを彼女は嬉しいと思ったのだ。

彼女は気付いてほしかった。自分の『個性』を。消耗品の身であれば決して許されないはずの、唯一の自分を。一般的な人間からは特に気にも留められないことだったが、エルフィンにも感情や個性がある。それなのにエルフィン舎の中で彼女はいつも『7741326番のエルフィン』だった。

しばらくそうしていると、ガンスティールがエルフィン舎から出るのが見えた。

彼の帰宅にあわせて、ユノーは自分の部屋を出たのであった。

「おはよう、ユノー」

昨日のこともあつてか、ガンスティールは珍しく気恥ずかしそうな表情をしていた。

「はい。おはようございます、お父様」

平坦に挨拶をして、ユノーは自分の席に着いた。

ユノーにとって朝食は戦いである。適度の運動をした後の夕食であれば栄養を取るためにも食事は必要だが、数時間前まで寝ていただけの朝は特に食欲がない。

ユノーにとって朝食は味気ない小麦粉粘土のような物で十分だったのだが、ガンスティールの娘としてこの屋敷に住んでは一回に出される食事の量が急激に増えた。

自分は繁殖用だと思っていたのだが、どうやら半年前に彼の気が変わったらしい。ガンスティールは気付いていないが、自分が食用として出荷される事をユノーは理解していた。

だからユノーは食べる。

食用になるからには肉を増やすのは当然であろうと分かっていた。食欲を増すために香辛料の多いものから食べ、食べ物を胃に流し込むためにビールを飲み、一定のルールに沿って食べ進んでいった。

しかし。ユノーは思う。毎回必ず食卓に並ぶ肉料理だけはどうかならないものか。

そう思いながらもユノーは作法通りの逆手のナイフで同種族の加工肉を切り分け、食べる。

この半年間で感覚が麻痺したのか、食べる事だけには抵抗はなくなった。むしろ最近では味の違いも楽しめるようになってきている。どうやら自分は人間に近くなってきたのかもしれない。何故なら人間はかつて共食いをする種族だったから。

養殖エルフィンであり同時に人間の娘となったユノーの食卓は今日も緩やかな狂気に見舞われていた。

共食いに対する危機感に薄れたユノーであったがそれは味や食感だけに限られた事であり、視覚的な嫌悪感だけはいつまでも拭えない。特に今日の骨付き肉などは特に忌まわしく思えた。

ユノーは次第に気づいていた。

死んだ同族に対する同情心は無い。彼らは人間の食料として生まれてきたのだから今日誰が食卓に上がろうとそれに対する悲しみは湧かない。

だが自分も食用になるのだと悟ってから、目の前に並ぶ料理が自分の死後の姿であるかのように見えてきた。部位ごとに切り分けられ加熱され調理されるのである。野菜などで飾り付けられて緑や赤で彩られるのだろう。逆手のナイフで切り分けられて濃厚なソースに漬ひたされるのだろう。

目の前の料理を見るたびに、ステーキにされた自分や炒め物・揚げ物・煮物・刺身にされた自分をリアルに創造できる。味わうたびに、自分はこの肉より美味しくなれるのだろうかと考えさせられる。必死で料理を味わうユノーを、ガンステイルは穏やかに見守っている。

いつそのこと本当に人間の子どもになれたらどれほど良いかとユ

ノーは思った。

きつと人間の子どもたちは自分の肉の味など想像もしないだろうに。

今日も、食べきれなくなるまで食べるさまを終始観察された。

丁寧にナイフとフォークを置いて並べて、汚れた口元を拭う。

満腹になるたびに醜く膨れ上がる自分の腹を恥ずかしいとは思った。

しかし食べれば食べるほどガンスティールが嬉しそうに笑うものだから、ユノーもつい限界まで食べてしまう。

食事の時間が終わればガンスティールは仕事に行ってしまう。そうすれば夕飯の時まで会えない。エルフィン舎にいるときは働く彼の姿を見かけることも出来たが、今では自分がエルフィン舎には行けなくなつたのでそれも出来ない。時折彼の思い付きで服を着させられたり屋敷の外に連れ出されたりしない限りは、意地悪な給仕たちがつろつく屋敷の中で自室にこもるしかない。

だから食事のときぐらい楽しく過ごしたかった。胃が重く苦しくてもガンスティールが喜ぶ姿が見られれば、何となくユノーも嬉しかった。なぜ嬉しいのかは分からないが、彼が自分のために尽くしてくれ気を使ってくれるというのは悪い気はしなかった。

「ご馳走様でした、お父様」

ユノーは満腹になるまで食べた事をアピールするため満面の笑みでそう言つて席を立ち、表情筋を戻して自室に戻ろうとしたとき、不意にガンスティールに呼び止められた。

「ユノー。少し、いいかい。」

ぎょくりと喉が鳴る。何かまた突拍子も無い事を思いついたのだろうか。それとも昨日の事を咎められるのだろうか。エルフィン舎でユノーが教えられた事は、感情を表に出してはいけないという事だった。それを昨日はつい感情にまかせて泣き出し、本音を口に漏らしてしまった。教育的指導を受ける事になるかもしれない。

また、ガンスティールの様子がおかしいのはユノーにとつて屋敷に来てからいつもの事だが、昨日は特に彼は落ち込んでいたから心配でもあった。

何事かと心配しながら様子を見守るユノーだったが、逡巡しながら彼が言ったのは意外な言葉だったので安心し、拍子抜けもした。

「料理は、美味しかったかい」

意外なのは、彼が初めて料理の味を彼女に訊ねたことだった。それまではユノーの食べる様子から彼女がどれを好んでいるかを推測するだけだったのに。

「はい。美味しかったです、お父様」

本心である。ユノーは料理の味を美味・不美味で判断する事も出来た。もちろん彼女個人の判断基準によるもので。味を楽しむ余裕が出来てから彼女は料理の好き嫌いもはっきりと認識するようになっていた。

今日も料理は見た目はともかく味は好みのものだったので総合的に「美味しかった」と答えた。

「料理はどの、どれが美味しかったかな」

ガンスティールは普段に増しておずおずとユノーに訊ねた。

いつもガンスティールがユノーに話しかけるときは、良く言えばいたわる様な、悪く言えば割れ物を扱う様な態度だった。それはそれで、まるで物語のお姫様のような気分にもさせられたのでユノーにとって悪くない。しかしその内容はいつも一方的なもので、彼女の個人的な感想を聞くことなど無かった。

ガンスティールの心境の変化についていけずいぶかしんだが、ユノーは質問には答える事にした。

「今日の料理では、焼いたジャガイモが美味しかったです」

料理の正確な名前などは分からないが、ジャガイモを薄く切って焼いてバターで味付けされたものが美味しかったのを覚えていた。

「そうか」

ガンスティールは給仕に作らせたリストを見る。ウムとうなって黙り込む。確かにそのような料理があったと確認したのか、まだ片付けられていないテーブルと見比べる。

しばらく不自然な沈黙が続いて、再びガンスティールはユノーに訊ねる。

「では今まで食べた料理の中ではどれが」

ユノーはガンスティール自身が施した教育のため、自発的に主観を述べるということが無かったが、聞かれたことには全て素直に答える。

「四十三日前の夕食に食べたゴボウの煮物が美味しかったです」

「そうか」

ガンスティールが訊ねてユノーが答える、というのが何度か繰り返されてユノーはある程度状況を把握した。どうやらガンスティールはユノーの主観をテーマに会話をしたらしい。それでもユノーがただ質問に答えるだけなので会話が続き困っているという様子だった。

そうしているうちに、ユノーはうまく会話が出来ずに困っているガンスティールの様子がいとおしく感じられるようになった。そん

な彼の様子もつと見たくなくなってユノーは意地悪く、彼の質問に淡々と答え続けた。

「ユノーは好きな食材はあるかい」

「はい、あります」

「そうか」

沈黙。

「ユノーが好きな食材はなんだい」

「ゴボウです、お父様」

「そうか」

そんな様子で会話が途切れ途切れに三十分も続いた頃には、ユノーはすっかり楽しくなって自然と笑みがこぼれるようになっていた。そしてその笑顔につられてガンスティールも緊張が解けたようで次第に会話も滑らかになっていく。

「ユノー、君はニンジンをよく食べ残しているね」

「はい、お父様」

「ニンジンが嫌いなのかい」

「はい、お父様」

「なぜ嫌いなんだい」

「苦いからです、お父様」

「好き嫌いしないでちゃんと食べないといけないよ」

「はい、お父様」

今にも吹き出しそうに笑いをこらえながら、二人は会話を続ける。

「今度からニンジン料理だけ出そうかな」

「それはいやです、お父様」

「じゃあ、今度からニンジンも食べるかい」

「……それは困ります、お父様」

どちらも耐え切れなくなり笑いあつた。その姿は確かに本当の父娘になったかのようにだった。

屈託ない笑顔で笑いあう二人を、給仕たちはどうしたものかと思

守っていた。まさか自分たちの主人がエルフィンと談笑することになるうとは思ひもしなかったのである。

いつもは、朝の食事を終えるとユノーは主に一人で自室にいる。日がな一日窓の外の景色を眺め続け、夕食の時間になるとダイニングルームへ行く。そして夕食が終わったら給仕に連れられて浴室に行き体を洗われ、寝間着に着替えて自室で就寝する。

それがユノーにとって退屈だが幸せな日常であった。

ユノーは、自分がいつ死ぬ事になっているのか知っている。

来年のオムニバルの時、「国王」に食べられる事になっているらしい。

オムニバルについてはエルフィン舎の書庫で関連図書を読んで知っている。「王様」は分からない。ただ、自分が王様に献上されるエルフィンなのであれば自分の身が不用意に危険にさらされる事も無いだろう。

食欲や睡眠欲などの生理的な欲求が満たされ、期間限定ではあるが身の安全が保障されている。退屈だなんて言うのは我儘かもしれないが、この日常が幸せである事は確かだ。

ただ、今日は違った。ガンスティールが仕事の合間に暇を見つけてはユノーに会いに来たのだ。そして何をするでもなく他愛ない話をして仕事に戻る。そしてしばらくしてまた会いに来て話をする。観察するだけでは分からないユノーの心の機微を直接の会話によって聞きたいと思うようになったのだろう、と彼女は解釈した。初めのうちは自分の主観を述べることや自分から発言することにも抵抗があったがすぐに慣れた。それも娘の役割だろうとユノーは多少の我儘も言ってみた。果物が食べたいと言えば給仕も呼ばずにすぐに自分で果物を取りに行ってくれた。

夕方になって仕事に戻ろうとするガンスティールに「まだ行かないで」「自分も連れて行って欲しい」等と言ってみたが、そういう要求を叶えてくれるわけではなかったようであった。



その日も夕食を食べ終わり、いつも通り給仕と共に浴室に行こうとしたが、今日はガンスティールがユノーの体を洗う事を申し出た。給仕も断る理由が無いのでそのまま彼女を引き渡し、別の仕事をしにいった

ユノーはガンスティールと一緒に更衣室で服を脱ぐ。生まれてから半年前まで服を着ずに生活してきたユノーにとって、裸でいることに恥ずかしさを感じるという概念は無かった。ただ夕食で膨れた腹をガンスティールに見られるのは恥ずかしかったので腹を隠すようにして浴室に入った。

浴室で彼に体を洗ってもらい、彼は自分で体を洗った。彼が洗い終わるまでユノーはその様子を浴槽でじっと見ていた。

エルフィン舎にいるときもユノーは体を洗う事はあった。屋敷での入浴のような穏やかなものではなく、朝晩の二回の洗浄の時である。あとは書庫に入る前や何かで汚れた時などに体を洗う事があった。しかしそれは自動洗浄器による洗浄であり、洗うという行為ではなくただ洗われているだけだった。

しばらくして体を洗い終わったガンスティールが浴槽の中に入りユノーの隣に座った。

ガンスティールが何かを話そうとしていた。何か特定の話題があるわけではなくただユノーと会話がしたいようだった。

ユノーはその様子を見て、ある事柄について語りかける事を決意した。

それは形式上、質問の形を取っていたが、ガンスティールにある決断を下してもらおうとするものだった。

「お父様、質問があります」

突然のユノーの言葉に、ガンスティールは助け舟を出された気になった。会話が出来ず考えあぐねているのを察してくれたと感じた。

だからその質問を聞こうと思った

「なんだい、ユノー」

「お父様にとって私は人間ですか、エルフィンですか」

ユノーはガンスティールを困惑させるつもりは無かった。

彼が昨晚あれほどまでに思いつめそして今日は何事も無くむしろ今まで以上にユノーに対して親密に接してくる事から、彼はすでにある決意を持っているだろうと感じたため、その決意を聞きたかった。

ガンスティールは半年間、エルフィンであるユノーを自分の娘として育てようとした。人間としてのマナーやルールを教える一方に王に献上されるエルフィンにするための下準備を続けていたのだ。その矛盾をガンスティールは明確にしないまま悩み続けていた。

そしておそらく彼は今日その問いに対する彼なりの答えを出したはずだった。

ユノーが思ったとおり、ガンスティールはその質問にはすぐに答えた。

「エルフィンだ。そして人間でなくとも私の娘だ」

ユノーが予想したとおりの答えだった。予想したとおりだったからこそ、寂しさを感じた。良い意味で期待を裏切つて欲しい、そう思っていたが当ては外れたようだった。

ユノーは思った。ガンスティールは自分の矛盾を言葉でごまかしているだけだと。

だがガンスティールが自分の質問にまじめに答えられようとしている事も感じられ、ユノーはそれを嬉しく思った。だから、自分が最も訊きたいことも答えてくれるだろうと期待した。

「では、何故私を娘にしようと思ったのですか」

ユノーは、ガンスティールにとって答えにくい質問であるとは分かっていた。それでも、自分がどれほど考えても理解できない事だったので直接訊こうと思った。ただ直接訊いたとしても彼自身が理解していない事かもしれないし、ユノーがそれを理解するには不足

している情報があるから分らないのかもしれない。

「養殖エルフィンには過ぎた行為かもしれない。しかし今ユノーは知りたい、理解したいと言う欲求に衝き動かされていた。」

「ガンスティールが答えないので、ユノーは質問を重ねた。」

「私がオムニバルで国王に食べられる事と、何の関係があるのですか」

「オムニバル、と言う単語が出た時ガンスティールは目を大きく見開いた。彼はユノーを娘として以来一度もユノーにその運命を語った事は無かったからだ。『オムニバルで国王に食べられる』など口にした事も無いつもりだった。給仕たちにとって、王に献上するとは言ったとしてもユノーを娘にした理由を明確には言わずにきた。彼女の質問に答える事も忘れてガンスティールはユノーに向き直り、彼女の両肩を掴んで問いただした。」

「知っていたのか、どこで、誰に」

「ユノーから見てもガンスティールは異常に興奮していた。ガンスティールにとって最もユノーに知られたくなかったのは、彼がユノーの運命を知りながら娘として接しているという事実についてだった。皮肉にもその事実は彼がそうする以前から彼女に知られていたのだが。」

「取り乱すガンスティールの指がユノーの肩に食い込んだ。上質なエルフィンの肉は柔らかく、指が皮膚を貫きそうになっていた。しかし痛みには悶える事もなく、ユノーはガンスティールが落ち着くまで待った。生きたまま内臓を食われる事に比べればその程度は痛みとも呼べないのだろうか。」

「百六十四日前、私が初めてエルフィン舎からこの屋敷の応接室に連れられてこられたときに、私を品定めしていた男が言っていました。その後お父様からも説明を聞きました。覚えていませんか」

「品定めをした男についてガンスティールは思い出した。王都から来たエルフィン品評委員会のイルストル卿の事だとすぐに分かった。それではユノーは初めからわかっていたということなのだろうか。」

だ。ガンスティールはユノーに、もっと詳しく教えてくれるよう頼ん

「一般に、エルフィンには人間よりも知能が低いと言われていてもそれはそうであった方が人間にとつて都合が良いからというだけ。十歳のエルフィンでも成人した人間ぐらいの知能はあります。

一般のエルフィンが言葉をしゃべれないのは教えられていないから。もちろんしゃべらない方が都合がいいからというのもあります。エルフィン舎では自発的な発言は禁止されていたから誰も会話をしようとはしなかった。エルフィンは言葉も喋れないから知能が低いと言つのを私は正しいとは思いません。エルフィンと人間のどちらの方が高い知能を持つているかは分かりません。エルフィンが早熟なだけかもしれないし、まずエルフィンにはその知能を示す術が無いですから。各地の農場で飼育されているので団結する事も出来ません。その方が人間にとつて都合がいいですから。

都合というのは、人間がエルフィンを支配する正当性についてです。エルフィンは知能が低いから人間が管理して飼育しなければならぬ、という理由に正当性をもたせるために団結させず言語を禁止していると私は考えます。あくまで私個人から見た場合ですから、おかしいと感じるかもしれませんが。

エルフィン全員の意見を聞いたわけではありませんが、それでもエルフィンはあえて人間に支配されているのだと私は考えます。エルフィンは野生でも力が強いわけではありませんから動物に襲われずたやすくに食べつくされ、いえ、人間から見たらエルフィンも動物ですね。ともかく、自分たちを守る術が必要だったので。またエルフィンが飼育されていない頃の人間は共食いによる精神的異常を起こしていたと言われています。ジク病と呼ばれるものがそれです。感染性タンパク質が捕食によって脳に蓄積し発狂するというのがジク病の正体のようです。当時のエルフィンは、ジク病により絶滅寸前の人間に目をつけました。そして人間と契約したのです。エルフ

インの肉を差し出して共食いの絶滅から人間を救う代わりに、外敵から身を守ってもらおうと。そうして出来たのがエルフィン農業なのではないかと私は考えます。

伝統的なオムニバルの演説は自己正当発言と言うよりは史実だったでしょう。『我々は古代種が抱えた罪と罰を』から始まるあれです。そうして人間とエルフィンの共存が始まって、エルフィンも人間の食欲をそそる様に進化してきました。早熟で多産なものや、肥えやすく脂肪が多く肉が柔らかいもの、頑健で病気にかかりにくいものなど多くの亜種が人工的に作られ、時には再配合されました。褐色肌に白髪に紅眼という私の品種など、おそらく自然界には存在し得なかったでしょう。

話がそれましたね。私が何を言いたかったのかということ……、ええと」

啞然として話に耳を傾けていたガンスティールの前で、ユノーは言い淀んだ。

言っても良いものかと逡巡した後、再び口を開いた。

「エルフィン自身も人間に美味しく食べてもらうためのたゆまぬ努力を続けているという事です。永きに亘る畜産業の歴史から、エルフィンは人間に食べられる事を遺伝子レベルで理解しています。だから」

ユノーは一旦言葉をとめてガンスティールと見つめ合った。

「罪悪感など持たなくて良かったのですよ、お父様は。少なくともお父様の農場のエルフィンは、人間に食べられるために生まれたことを理解し受け入れています」

そして「私もね」と付け加え、深呼吸してからユノーは微笑んだ。また「こんなに長く喋るのは初めてだったから少し疲れました」と嬉しそうに話す。

ガンスティールにも理解できない事をユノーに一気に言われて、彼は混乱していた。

実際、ガンスティールは彼女が話した事の半分も分からなかった。

だが、農場に置いた書庫からエルフィンたちは実に多くの知識を吸収していると言う事は分かった。そして、一般に言われている「エルフィンの知能は低い」というのは自分たちの思い違いかもしれないとも感じた。

ガンステイルはユノーを含めたエルフィンを過小評価していた。国王に献上されるといふ話はエルフィンにとって難しいと決め付け、どのように教えれば理解してくれるかと考えあぐねていたのだ。もちろん彼女からすればそれはガンステイルの取り越し苦労ではない。

ガンステイルは、もう自分が何を言ってもユノーは理解してくるだろうと思ったようだった。

だから彼はようやく自分の口から全てを話した。王都からの伝令『満足なエルフィン』の育成についてを。

結局ガンステイルとユノーは長時間にわたり浴室を占拠した拳句、すっかりのぼせあがった。ガンステイルの部屋にくったりとしたまま運ばれてきたユノーは「私はエルフィンだからこれが自然体なのですよ」と頬を膨らませながら言っただけで彼のベッドにもぐりこむと、そのままやすやすと眠ってしまった。

ユノーにとって、今日ほど退屈しない一日も今まで無かつただろう。疲れ果てたようですぐに寝込んだ。思えばユノーは露骨に感情を表に出すようになった。エルフィンがこれほどまでに感情豊かだったとはガンステイルを感心させるほどに。

「毎日が退屈」と怒っていた。「給仕が意地悪だ」と愚痴も言った。「エルフィン肉の料理が大嫌い」と悲しげに言われて初めてガンステイルは自分の粗忽さに気付いた。そして「お父様が大好き」と照れながら言った。最後に「私はいつまでもお父様の娘ですよ」と寂しそうに言った。

ガンステイルは今日の出来事をしっかりと日記に書きとめると、消灯しユノーを起こさないように自分もベッドに入った。小さな白

髪頭を撫でて、自分も就寝した。

翌朝なかなか起きないガンスティールを呼びに来た給仕からは大いに誤解された。

それからというもの、いよいよユノーが退屈しない日常が始まった。快活に話をしたり笑ったりと毎日あわただしく生きる彼女に対し、高齡の給仕であるエメトなどはさらに疎ましく思ったようだったが若い給仕たちは彼女に対して友好的に接するようになった。その様子をガンスティールは嬉しく思った。そして彼もまた今までに比べユノーには積極的に接するようになった。時には自分の意見を正直に言うユノーと衝突し口論になることもあった。だが、そんなときには給仕たちがユノーをかばう程であった。一番若い給仕のシエンレイなどは、まるで自分のペットが出来たかのようにユノーとはしゃいでいた。

王都の指示から七ヶ月、ユノーはしつかりと肥えていた。もともと細身だった体に、不自然な贅肉が定着しつつあった。

## 第4話 親友 4 - 1

### 第4話 親友

季節は流れ、秋が訪れた。

約束された刻限は確実に近づいていた。しかし誰もが日常に溺れ、定められた運命を忘れていた。

そんなある日、ガンスティールは屋敷に画家を呼んだ。それは地元の山村で絵画の修行に励む若い学生だった。

ガンスティールはその若い画家にあらかじめ報酬を与えてユノーの肖像画を描くように依頼し、給仕のシエンレイにユノーの世話を任せると自分はエルフィン舎の世話に行ってしまった。

残されたシエンレイは、画家と家畜の世話を押しつけられたことに少々の不満を抱いたが、口には出さなかった。

「ユノーさま、あんまり画家先生をいじめないくださいませ」  
ビノシエ農場に仕える若い給仕、シエンレイがやさしくユノーをたしなめている。

画家先生、と呼ばれた青年は眉をひそめて困った振りをしてながらも、黙々とキャンバスに木炭を撫でつけている。

ユノーと呼ばれた少女は簡素なスツールに腰掛けて足をブラブラと揺らしている。その反動で、空中を眺める頭が前後に揺れている。これほど動いては彼女の姿を絵画として描きとめることもできないだろう。

あからさまに退屈そうな表情はむしろ愛らしく、画家の青年も諦めて笑っていた。

時刻が昼下がりということもあるが、屋敷の中に人がいるのはこのユノーの私室のみであった。他の者は農園で家畜の世話をしていることだろう。

「構いませんよ、この年頃ともなれば遊びたい盛りでしょうし」  
画家の青年は穏やかな表情でユノーを眺めた。

「それに、私も彼女を見ているとなんだか心が安らぎます」  
シエンレイと画家に眺められてもなお、ユノーは熱心に足を前後に揺らしていた。

主人の娘が一体どのように描かれているのかと興味を持ったシエンレイは、そつと画家の背後にまわりキャンバスを覗き込んだ。

そこに描かれていたのは、おとなしく椅子に腰かけて物憂げに眼を伏せる少女であつた。

雪のように白く短い髪。浅黒く灼けたように黒い肌。潤んだ緋色の瞳。シエンレイより僅かに幼い顔立ち。そしてその年ごろの娘に相応のふくよかな腕と足。その身に纏っているのはユノーのお気に入りに、薄緑色のドレスだ。

かわいい。シエンレイは素直にそう評価した。

確かに、口を開かずに大人しく座ってさえいればユノーはエキゾチックな魅力を持つ少女ではないか。

だが。

「なぜお父様は今更私の絵なんて欲しがるのがかしら」  
じつとりと、ユノーの口から怨嗟の言葉がこぼれた。それはまるで、彼女も人間と同様に退屈を嫌う生き物であると主張しているかのようなだった。

ユノーは、シエンレイの主人ガンスティール・ビノシエの娘である。表向きはその通りであつた。

けれどもシエンレイは内心の違和感をどうしても拭いきれない。何故なら、ユノーが主人ガンスティールの娘となつたのはつい最近のことなのだから。

そんなシエンレイの戸惑いを知ってか知らずか、ユノーは愚痴をこぼしながらその細く長く尖った耳をピコピコと上下させていた。

ユノーの長い耳の根元、ちょうど人間でいうところの耳たぶには、金属でできた小さな装具が取り付けられていた。そこには7741

326という粗雑な刻印がある。人間の少女が着けるようなピアスなどの装飾ではない。それは個体を識別するためのタグだ。

農業貴族ビノシエ家の一人娘ユノーは、識別番号7741326番のエルフィンであった。

彼女の白い髪は繁殖力の高いベロニカ種の特有のものであり、褐色の肌は肉質の柔らかいラプラ種の特有のもの。ユノー・ビノシエは良質なエルフィンを生産するために品種改良された繁殖用のエルフィンだ。

シエンレイが覚えている限りでは、半年前までは確かにそのためだけにこのビノシエ家の農場で飼育されていたはずだった。

給仕の身分で言える事ではないのだが、シエンレイはその事態を異常であると考えていた。今でこそ事実として受け止めているものの、すべてを理解し納得しているとは言い難かった。

エルフィンの身でありながらビノシエ家の娘として迎えられたユノー。

シエンレイは目の前で不満を言う家畜を眺めながら、どうしてこんなことになってしまったのかしらと好奇心本位で思索した。

シエンレイは思索する。彼女にとってエルフィンは家畜であった。物を言わず、ただ人に食されるために生産され消費されるだけの存在のはずだった。シエンレイでさえ、そんなことは知っていた。ではなぜ主人ガンスティールは家畜に衣服を与え、発言を許し、私室まで与えているのか。そもそも世継ぎのいないビノシエ家において何故、家畜を娘として扱うことになったのだろうか。

もちろん、シエンレイの心持ちもこの半年間で随分と変わった。まず、人語を解さないと思いついていた家畜のエルフィンがこれほどまで感情を豊かに表現するということを受け止められるようになった。それまでシエンレイが知っていたエルフィンとは、白い撥水タイルの上で無気力に横たわる、人間によく似た生き物であった。エルフィンの注文が多い時にはシエンレイもその屠畜を手伝ったこ

とがあるが、彼らは全て無言で枝肉になつていったはずだ。痛みを感じるかどうかすら判別しがたい生き物だった。

それが今では、気ままに振る舞うユノーに憤りさえ感じる程にエルフィンというものを自分と対等な存在として認識していた。

そしてシエンレイは、ユノーに嫉妬していた。エルフィンのくせに、ユノーが貴族の娘という身分を得たのだという事に対してだ。しかもユノーは彼女自身の裕福な生活に不満を漏らしている。

主人がユノーを娘と呼ばなかつたなら、あの真つ白な撥水タイルのエルフィン舎に連れ戻してやるのに、とすらシエンレイは思った。もし本当にそうしたらユノーはどんな声で鳴くだろうかと残酷な妄想がシエンレイの脳裏に広がった。

しかし、彼女がそんな妄想に耽つたのはほんの一瞬だった。それはあまりに残酷な妄想であつたからだ。シエンレイにはその妄想の続きを容易に想像できた。きっとユノーは今と同じような調子で気だるげに空中を眺めるだけなのだろう。今エルフィン舎に戻つたところで、ユノーが生きてきた十余年と何も変わらない、真つ白な撥水タイルを眺めるだけの生活に戻るだけなのだろう、と。

白いキャンバスに描かれたユノーのスケッチは、まるで彼女が生きてきた世界のように白く、そして小さな枠に切り取られていた。

「よく描けているじゃないか」

仕事を終えて屋敷に帰つたガンスティールは、若い画家が描いた肖像画を大いに褒め称えた。

彼は絵の出来栄えに納得したようで、食堂に飾るべきだと言つた。屋敷の給仕が数人がかりで肖像画を食堂に運び、壁に飾ろうと高く掲げた。そこで、給仕の中でもこの屋敷に長く勤めるエメトが絵を見てこう呟いた。

「あら、その絵は屋根裏の倉庫に仕舞つたはずではないの」と。

その言葉を聴いて、食堂にいた給仕すべてが気づいた。

雪のように白く短い髪。浅黒く灼けたように黒い肌。潤んだ緋色

の瞳。ふくよかな腕と足。それらが、主人ガンスティールが十数年前に描いたという恋人の肖像画の女性と酷似しているということに。

#### 第4話 親友 4 - 2

月日はさらに流れる。

ある寒い冬の朝、ガンスティールの旧友であるオディナロが尋ねてきた。冬があげればオムニバルが始まるので、そのための準備を手伝いたいとあらかじめ手紙で連絡してきていたのだ。昔から親交のあったオディナロはガーベント領と王都オルパスの中ほどにあるユーラ地方の豪族の息子であり、自領地の農業発展のために各地を放浪中であつた。

ガンスティールは国王に献上するユノーのほかにも、オムニバルのために通常のエルフィンを飼育していた。大陸全土でオムニバルの時期に重なってエルフィンの注文が入る。ユノーも元はオムニバルに出荷するエルフィンを生むための母体となるはずだつた。

また、オムニバル直前の加工だけでは一度に大量の食用肉を出荷する事は出来ないため冬の間から加工し保存しておくものだつた。オディナロからは冬季の加工保存の工程を学びたいから見せてくれと言われていた。

屋敷に来たオディナロがユノーを見たとき、絶句していたようだつた。「前もつて手紙で彼女の事を相談されていなければガンスティールの正気まで疑うところであつた」と後でガンスティールは彼から聞かされた。

さつそくガンスティールはオディナロと共にエルフィン舎に向かった。他の従業員も出勤してきていたので、早速エルフィンの屠畜作業を始める事にした。

ガンスティールの農場は特別大きいわけではないが屠畜・精肉場が併設されているため、枝肉の状態で市場に出荷する事が出来る。他の農家と同様に、強い要望があれば生きたまま出荷する事もあつた。

レインコートを羽織ったガンスティールはオディナ口の目の前で手際よくエルフィンに肉へと変えていった。飼育場から連れてきたエルフィンを一人ずつ小部屋に入れ、台の上に寝かせて眉間にツルハシを突き立てる。痙攣が治まるまでツルハシをねじって脳をかき回す。その間に他の作業員が頸動脈をナイフで裂いて血を抜くと共に食道を縛る。勢い良く飛び出す血液は頭上まで跳ね上がった後、シャワーのように降り注いだ。ある程度血流が収まると片足で逆さ吊りにし、天井に設置されたレールのフックに取り付けて隣の部屋へ移送する。屠畜されたエルフィンが隣の部屋に行くのを確認して水道管のバルブを開くと、天井から水のシャワーが噴出して部屋の血が洗い流されていく。ナイフとツルハシは浄化水槽に入れられ消毒される。丁寧に一頭ごとに作業を繰り返していく。

出荷用のエルフィンは主に生後十年ほどのものを使用する。牝牝の差がほとんどなく、ある程度成長していることが望ましいとされていたからだ。それでも二次性徴の見られない牝牝が区別無く手際よく屠畜されていく様はオディナ口にとって衝撃的なものではあった。オディナ口もオムニバルの時期には儀礼としてエルフィン肉を食べるが、あれらの肉料理はこのように生産されているのだということに改めて実感した。

屠畜作業が終わるとガンスティールは最後の肉を天井にぶら下げて引きずりながら隣の部屋へ移動した。あわててオディナ口も追いかける。

眉一つ動かさずに淡々とエルフィンを屠畜するガンスティールに、オディナ口は底知れぬ恐怖を覚えたのだった。オディナ口は、ガンスティールがつるはしで自分の額を貫く場面さえ想像した。

隣の部屋では既に他の従業員によって解体作業が進められていた。ぶら下げられて屠畜部屋から出てきたエルフィンは首を切り落とされ、腹を裂かれて内臓を抜かれ、皮をはがれた。手首、足首を切り落とされた後は背骨から左右に切り分けられ、二つの枝肉になった。この状態で保存され、出荷されるかもしれないオムニバルの時に

取り出される。頭部と内臓は腐りやすいので、検品されてすぐに出荷される。皮は廃棄される。エルフィンの皮を皮紙として使う風習もあったが、製紙技術が発達した今は皮紙専用のエルフィンが飼育されている。

オデйнаロは解体作業を軽く手伝わせられただけだったが、気分が悪くなったようだ。

生き物の肉を食べるという事は、自分が生きるために他の生き物を殺すという事である。人間も動物の一種である以上その摂理から外れる事は出来ない。しかし人間は役割を分担する事で各分野への専門性を高め発展してきた。それと同時に、生き物を殺して加工しその肉を食べるという生命活動としての一連の行為が、殺す事と加工する事と食べる事が既に分離されてしまっている。生きるために食べる、食べるために殺すという概念さえも分離されてしまったのだ。だから、食べ物が生き物だったという事実、生きるために殺しているのだという事実には直面すると目を背けたくなくなってしまふ事もあるのだろう。

そんなオデйнаロの様子をガンスティールは悪いとは思わない。多くの人間がオデйнаロと同様の反応を示すのだから。

全ての枝肉を倉庫に運ぶ最中に、オデйнаロがガンスティールに話しかけてきた。

「屋敷にいたエルフィン、あれがドミノ・オムニバルに出す奴か」  
ドミノ・オムニバルとは来年開催される狂食祭の通称で、来年は国王アラクトの七十二年目の聖誕記念祭とあわせて行われるため王都では聖・狂食祭、ドミノ・オムニバルと呼ばれているとの事だった。

「俺が知っている『満足なエルフィン』とは違うな」

オデйнаロがそう言った言葉の意味をガンスティールは気になり問い直した。

「俺の郷には関係ないから詳しくは知らないけどな」

オデイナロが説明するところによると、今年の春以降ある料理が王都を中心に噂になってきているのだという。前回のオムニバルで異国から献上されたものを国王が食べて気に入ったようで、国王の機嫌を取ろうとその料理の研究が国内各地で盛んになっているそうだ。

「王都近隣の、領主イサクのマキシム領がわざわざ外国人を連れてきて料理を研究していた。俺も満足なエルフィンとやらは食べた事が無いが、飼育している農場は知っている。調べてみる価値はあるんじゃないか」

オデイナロの言葉が本当だとしたら。ガンステイルは当ての無い飼育方針に光明がさしたと思った。今まで王都からは助成金が来るばかりで『満足なエルフィン』がどういったものなのか分からなかった。料理に付けられた名前とも知らなかった。ドミノ・オムニバルを主催する聖誕祭準備会も詳しく分かっていなかったのかも知れない。残りの四ヶ月の飼育の役に立つのならば、『満足なエルフィン』について詳しく知っておく事は悪くない。

三日後、ガンステイルはオデイナロの案内でマキシム領を訪ねる事にした。

領主マハエルのガーベント領から領主イサクのマキシム領まではおよそ五日間かかる。馬車でガーベント領の中心にあるマハエル城下町まで三日かけて行き、丸二日かけて鉄道に乗るのだ。鉄道とは工業的な発達を遂げたマキシム領が開発した交通機関であり、いまや大陸ウエルトウムを治める二十四の領地を繋いでいる。鉄道が無い頃をガンスティールは知っているが、王都から彼の農場まで伝令役が来るのに三ヶ月かかっていたはずだ。

ウエルトウム王国が内包する二十四領地。これらの特徴は、領地という枠組みに囚われすぎていたために各々の領地ごとに全く異なる文化が発達した事にある。隣り合った領地であっても、境界線を越えた途端にまるで別世界、というのは当たり前になった。それは、各領地の長である領主が他領地の文化を受け入れるのを強く拒んでいたからだった。そのため、かつてこの大陸に共通していた文化を基盤としてそれぞれが独自の発展をしていた。そのように発展してきたウエルトウムの文化も、この鉄道という交通手段の登場によって領地の枠組みを越えて混合されつつある。

二週間ほどの長旅になると思い、ガンスティールはユノーを連れて行くことにした。また世話係として給仕のシェンレイもついてきた。

ユノーはお気に入りの緑色のドレスを着て、つばの広い帽子をかぶった。寒さよけのための耳あてで長い耳を押しこんでいるので一見すると人間に見間違えるかもしれない。ユノーにとって屋敷の外で外泊するのは初めてだった。ガンスティールの気まぐれで屋敷の外に連れ出されることはあったが、いつも夜までには屋敷にもどっていたからだ。

道中の暇つぶしにユノーが長話をする度に、オディナ口はその博識ぶりに驚いていた。また王都からの給金のほとんどが自分の食費

や娯楽費にかわっているという話などは特に彼の興味を引いたようで、何度もその話を詳しく訊いていた。

オディナ口の出身である領主サラのユーラ領を含むユーラ地方ではエルフィンよりも大トカゲを主に飼育している。エルフィン肉よりも大トカゲ肉の方が好まれ、また大トカゲは労働力にもなっているという。ユーラ地方では馬車の代わりに二足走行の大トカゲに引かせる蜥蜴車と呼ばれる乗り物が一般的であることも有名で、領主サラはトカゲの女王とまで呼ばれ親しまれているとのことだ。

旅の三日目の夜には予定通りマハエル城下町まで着いた。城壁の外で一泊した後、同じく城壁の外にある駅から鉄道に乗り込むことにした。

マハエル城下町は領主制度が出来る前から全く変わらぬ姿で存在し続ける城壁都市だった。なんでも、景観を壊さぬようにと老朽化した建物は同じ形のまま立建て直すのだという。古めかしいレンガ造りの家も内部は堅牢な鉄筋コンクリートで補強されているという。町の中心には領主マハエルの居城がある。町ごと城壁で囲っているため、この城自体には仕切りとしての壁は無かった。そのような町が、巨大な岩を積み上げて作られた壁の中にあるのだ。城下町に入る為の門は日が沈むと閉ざされ誰も入る事が出来ない。そのため門の外には小さな宿場町が形成されていた。門が閉まってから開くまでの間に旅人を寝泊りさせる所だったが、冬のように旅人の少ない時期は閑散としていた。

翌朝、一行は昼ごろになって駅へ向かう。交通の便が良いようにと城門から徒歩で行けるほどの距離に駅はあった。駅は、よく見なければそれと分からぬ程度の物だ。地面を這う四本レール伝いにタイルで舗装され、ガーベント駅と書かれた看板が鉄柱に打ち付けられているだけのものだった。

しかし、驚くべきはその駅の広大さである。線路伝いに舗装された道があると思って五分ほど歩いていたら鉄柱を発見し、ガーベント駅・王都方面と書かれていた。そして後ろを振り返ると遙か後方

にもうひとつ鉄柱があり、タイルの道はそこで途切れる。つまり、あまりに長すぎて道にしか見えぬ物が駆だったというわけだ。

ガンスティールたちがそこで一時間ほど待っていると、山の谷間から大きな黒い影が見えた。黒い煙を上げながら走るそれはマキシム領が誇る蒸気機関車であった。ひとつひとつの車両が小規模な家ほどあり、それが二十四両編成という恐ろしく巨大な物体だった。

車両に乗り込む入り口に係員がいて、そこで金を払った。運賃と引き換えに客室の鍵を借りて、車内への階段を上った。入り口の隣に見える車輪はユノーの身長とほぼ同じだけの大きさがある。これだけの巨大な鉄製品を製造する技術はまだガーベントにも無い。

車内に入ると二層構造で、中には多くの客室があった。その中から自分たちに割り当てられた部屋を見つけて入り、ようやく落ち着く。電車は一時間後に出発した。

四本のレールの上に車輪を乗せて走るその鉄の塊は乗り心地が悪く、レールの継ぎ目で生じる定期的な振動が内臓を揺さぶるようであった。二日間この振動に耐えねばならないと思うと一同は憂鬱になった。

これから行くマキシム領は工場産業という手法によって飛躍的に発達した領地である。工場という作業所に労働者を集め、工程を分割して特定の単一作業にだけ特化するように労働者を教育する事で生産性の向上をはかったシステムだそうだ。ひとつの簡単な作業だけさせる事で得られるメリットは、覚える作業の単純さからどんな人でも早く習熟できる事と、労働者には単純な労働力だけを求められるので労働者の取り替えが利くということにある。また蒸気機関という動力の発明によって、ごく単純な反復作業は人手を使わずに行うこともできるようにもなった。その蒸気機関は未だ研究がなされていないばかりで実用されている例が少ないが、唯一大衆からも受け入れられ生活に役立てられているものがこの蒸気機関鉄道だった。一定のリズムで振動する車両と旅の疲れから、一同は二日間の行程をほとんど寝てすごした。



#### 第4話 親友 4 - 4

マキシム領の中心地であるイサク城下町は常に空が濺んでいた。急速な発展で町は広がり、城壁が取り壊されて町が延々と続いていた。

町は縦横無尽に広がっている。法則性も無く、秩序も無かった。廃墟同然の町並みにガンスティールらは辟易した。建物と建物の隙間には人が住めないほどの細い家が割り込んでいた。つぶれた家を取り壊さずに新しい家をそのまま乗せていた。あまりに高い建物は自重で崩れていた。さらに、それだけ建物が放置されていても路上で生活する者も見えた。道路に面した壁が崩れ落ちているのもかまわずに営業を続ける工場もあった。

城下町から馬車で半日経ってもそのような町は途切れず、目的のエルフィン農家も住宅に取り囲まれていた。

その農家は一見すると単なる集合住宅のようにも見えた。というのも、他の建物同様に大通りに面して建っており、塀なども無く、簡素な扉が建物の壁にあるだけだったからだ。

まずオディナロがその建物の扉の横にある呼び鈴を押した。しばらく待つと従業員と思われる女性が扉を開けて彼らを迎え入れた。マキシム領の畜産農家リトはガンスティールと同年代の男だった。白髪まじりの髪を短く切りそろえ、髭をきれいに剃っていた。

リトはオディナロと見知った仲のようで、ガンスティールの訪問を快く受け入れてくれていた。

「初めましてガンスティール。君の噂はいつか聞いたことがある。私がこの工場長、リトです」

リトは自分を工場長と紹介した。彼が言うには、この領内ではエルフィンの生産も工業としてみなされている為に工場長と名乗らなければ補助金を受け取れないとの事だった。

「十数年前からこの農場も精肉工場として経営している事になって

います。エルフィンの飼育はおまけのようなものと考えられている  
ようですね」

リトは薄緑色の帽子と同じ色のツナギを恨めしそうに引っ張って  
見せると、すぐに飼育場に案内してくれた。

ガンステイルのエルフィン舎に比べれば小規模ではあるが、内  
容は特に変わらない。ただガンステイルを驚かせたのは、そこに  
働く従業員の姿についてだった。

全員、耳をそぎ落とされている。

リトは初め、全員耳の病気にかかったと説明した。しかしガンス  
テイルに指摘され、すぐに言い直した。一般の人間には見分けも  
つかないだろうが、ガンステイルはすぐに気付いたのだ。そこで  
働いているものが全てがエルフィンであることを。

「そうだ、全員エルフィンだよ。ここで働いているのはね」

リトは事情を説明する。十数年前、農場が工場と言い換えられる  
前からここではエルフィンを労働力として使っていたのだそうだ。  
しかし工場という名称を付けさせられると同時に、労働組合から  
市民に労働を与えるように」との通達があり、人間の従業員を登録  
しなければならぬと言われたのだそうだ。産業の発達によって人  
口が爆発的に増え、巷に労働力が溢れかえり、結果大量の失業者が  
路上生活をしているため、事業主は労働者を雇わなければならない  
ということになったらしい。エルフィンに働かせるぐらいならば人  
間に労働を与えると。さもなければ援助を打ち切ると。

しかしリトは自分の農場、今の工場に赤の他人を受け入れる事を  
強く拒んだ。そこで今までいた従業員のエルフィンたちは自ら耳を  
切り落とし、従業員は全員人間でありこれ以上労働者を雇う事はで  
きないと労働組合を説得してしまった。労働組合の調査員には耳の  
有無でしか人間とエルフィンを見分ける事が出来なかつたので説得  
に応じた。もちろんその調査員はごく一般的かつ常識的に、エルフ  
インにはその様な抗議行動が出来るはずがないとの判断をしたまで  
だった。またこの農場に就職を希望する者も他の従業員の切り落と

された耳の跡を見て辞退していったという。

「時代の変化には逆らえないのかもしれないね」

そうつぶやいてリトは帽子を取って頭をボリボリと掻きまわった。

彼も自ら耳を切り落としていた事に気付かされた。自分のために耳をそいだエルフィンに償うためだろうかとガンステイルは察した。

飼育場の後は屠殺場、精肉場を見学させてくれた。屠殺場はガンステイルのエルフィン舎のものと大差なく、雨合羽を着たエルフィンが裸のエルフィンを次々に銃殺していた。精肉場は自動機関が導入されており、内臓を取り除かれ屠殺場から自動的に運ばれたエルフィンの肉塊が一瞬でミンチにされていく様子が見られた。

「今では加工肉しか売れなくなつてね」とリトは説明する。ミンチ状にしたエルフィン肉の練り物は食べ残しが少ないという利点がある。着色料や保存料などを混ぜる事で色も良く日持ちも良くなるから今ではこれしか出荷していないのだそうだ。

#### 第4話 親友 4 - 5

リトは見学ルートの説明を終えると、一同を食堂に案内した。見学者にはいつも工場産の肉料理を振舞うのだという。給仕姿のエルフィンが温かい料理を運んできたのは練り物を利用した肉料理の数々であった。その給仕は褐色肌に長い白色の髪を伸ばし、赤い眼をした精悍な顔立ちの牝だった。年はおそらく三十歳近く、エルフィンにしては高齢だろう。ユノーはその給仕に対し親近感を抱いた。もしも来年のオムニバルで食べられなければ、このような美しい女性になれるのかと胸をときめかせた。そしてユノーの想像の中では大人になった彼女の隣にガンスティールの姿があった。それは、未来のないユノーにとっては過ぎた妄想でしかなかった。

その給仕は料理を運びながらガンスティールをじつと見つめていたが、ユノーの視線に気付くと振り向いてユノーに優しく微笑みかけた。ガンスティールはその給仕がまるで存在しないかのようなそぶりを見せていた。もしくはあまりその給仕のことを意識していないのかもしれない。

その給仕エルフィンをじつと眺めるユノーに対してリトも興味を示したのか、彼はその給仕を指して言った。

「お嬢さん、エルフィンが働いているのは珍しいかい。それはレナ。数年前からうちで働いているエルフィンだよ。誰かに愛玩用としてでも飼われていたのか、ここに来る前から言葉が喋れたんだ。名前は私が付けたけどね」

リトに紹介され、レナは深々とお辞儀をする。

「初めまして、お嬢さん。レナです」

「はい、初めまして。私はユノー・ビノシエです」

レナの礼に応えてユノーが自己紹介をした。レナはやわらかい笑みを浮かべていた。

レナは料理を運び終わると、静かにリトの隣に立った。そして、

用命があればいつでも声を掛けてくださいと言って一歩下がった。

リトの呼びかけで料理を食べる事になる。そこでユノーが帽子を外すとリトは、ほう、と感心したようなため息をついた。

「ガンスティールさん、この子はもしかして」

そしてリトはガンスティールから聞き出そうとじつと彼の言葉を待つ。

「私の娘ですが、なにか問題でもありませんか。リトさんなら分かっていただけるかと思いい連れてきたのです」

ガンスティールは王都からの手紙とこれまでの八ヶ月を説明した。

リトは真剣にガンスティール話を聞いた。そして何かを取りに厨房へ行った。

十数分後にリトが持ってきたのは一品の料理だった。小さな肉の塊が盛り付けられている。肉の繊維が見えるところから、練り物とは違う料理であることが伺える。

「これが『満足なエルフィン』です」

リトは皿の上の小さな肉片を指して言った。そしてガンスティールの目の前に置く。

促されるままにガンスティールはそれを食べた。

蕩けるような食感のそれは確かにどのエルフィン料理よりも味わい深かった。

「これは、内臓ですか」

一口食べてガンスティールは訊ねた。リトはその通りと答えたが、ガンスティールにはそれがどの器官かは分からなかった。

「これはね、肝臓ですよ。脂肪肝を発症しているから分かりませんでしたか」

リトは、自分も『満足なエルフィン』を飼育するように準備会から指示されたと言った。そしてその事を領主イサクに報告すると、イサクは『満足なエルフィン』について外国に使者を派遣しその正体を探ってくれたのだそうだ。そうしてイサクの使者が調べた事の全てをリトに教えてくれたのだという。

「『満足なエルフィン』とはただの料理の名前でした。しかしその飼育法は特殊なものでしたので『満足なエルフィン』に使用されるための特別なエルフィンをこの工場では飼育しています」

リトは一同が食事を終えるのを待つと、ガンスタイルだけにその飼育法を教えるといってその飼育室へ案内した。時間がかかるからという事で、残されたオディナ口は宿を探しに外へ行つた。ユノーとシエンレイは食堂に残つたが、給仕のエルフィンの案内で工場内の他のエルフィンの飼育場を見学させてもらう事にした。

ガンスタイルがリトに連れられて到着したのは、工場の中庭だった。中庭の片隅に仮設の小屋があり、そこが特別なエルフィンの飼育場所だと教えられた。

小屋には蒸気機関が設置されていて、地面からその微細な振動が伝わつて小屋全体がカタカタと小さな音を鳴らしていた。

嚴重に鍵を掛けられた扉を開けて、二人は中に入る。暗くてよく見えないが、ものすごい悪臭が鼻を刺激した。腐敗臭と汚物の匂いである。

「こんなに嚴重に鍵をかけて、中のエルフィンはどうなっているのですか。しかもこんな悪臭では肉に匂いが染み付いてしまひそうです」

口で呼吸しながらガンスタイルはリトに質問する。しかしリトは何も答えず小屋の中の明かりをつけた。これが答えだと言わんばかりに。

そしてガンスタイルはそれを見て全てを察した。

その小屋の中には二十個ほどの装置があり、うち八個にはエルフィンが繋がれていた。残りの十二個にもかつてエルフィンが繋がれていた形跡が見られた。

装置は部屋の中央から伸びてエルフィンの口につながれている。つながれたエルフィンは体を小さく折りたたんでかごの中に入っていた。かごの側面に頭と手を出す穴があり、エルフィンはその穴に

はさまれて身動きひとつしていかなかった。醜く膨らんだ体は自重で地面に押しつぶされている。排泄物はそのまま垂れ流されていて、尻は腐って半分溶けている。首と手はかこの穴に接するところから痛んでいて手首の骨が見えているものもあつた。時折、部屋の中の機械が音を立てるとエルフィンには体をよじる様にして悶えた。エルフィンの口と装置は強力に縫い付けられていたが、その縫い目からは液状の餌が零れ落ちていた。

「これが『満足なエルフィン』の為の飼育場です」

リトは中央の装置だけを見て、八頭のエルフィンには目もくれなかつた。

「初めは二十頭から始めたのですがね。六頭は試食に、もう六頭は腐って自然死しました」

ガンステイールはその凄惨な現場から目が放せなかつた。

「先ほどの少女、あれが君の『満足なエルフィン』だったのでしょう」

リトは真つ直ぐに中央の装置だけを見ながらガンステイールに話しかけた。

「ずいぶん綺麗でしたね」

ガンステイールは何も言えずに呼吸を荒くするだけだつた。

「ほらあ、ユノーさま。あつちのエルフィン見てください、交尾していますよつ。後学のために良く見ておきましょうか」

「遠慮します」

ユノーはシエンレイと共に『エルフィン生産部』を見学していた。それはつまり繁殖場の事だつた。

シエンレイは初めて見るエルフィンの交尾に興味津々と言つた様子で、柵の中で行われる繁殖行為の見学に夢中になっていた。一方のユノーはそんなシエンレイにまるで自分の交尾を見られているかのような錯覚に陥り、悶えた。

「エルフィンも人間もやる事は同じなのねえ、素敵だわあ」

ユノーが静かに恥ずかしがる様子が可愛いと思い、シエンレイはわざと自分の感想を声に出してユノーに聞かせていた。

一方のユノーはというと、柵の中で繁殖する裸体のエルフィンのお熱気と匂いでむせ返りながら、目の前の光景が自分のことのように恥ずかしいばかりだった。そしてそれを友人となつたシエンレイに見られるのも恥ずかしかったのだ。

エルフィンの性は人間と同じく雌雄の二種類である。ただ生殖行為については人間とは異なる点が一つつだけある。

それは、性交が妊娠出産の為だけにあることである。人間社会において性交は子作りのためだけでなく一種のコミュニケーションとして尊重されているのに対して、エルフィンは互いのコミュニケーションをする必要がない為に濃密な性交をすることが無い。ただ性的な愛玩用に教育されたエルフィンであれば人間に対しても同等の快樂を与える事が出来るとは言われている。

シエンレイはオデイナ口が探しに来るまで嬌声をあげながらその繁殖場を見学していた。

その間、ユノーはうつむいて頬を染めるだけであった。

「お世話になりました」

日が沈み工場から帰るとき、ユノーはペコリとお辞儀をしてリトに礼を言った。リトは満面の笑みでユノーを見送ってくれた。

オディナロはリトの工場の近くで見つけた宿に三人分の部屋を用意してくれていた。ガンスティールは工場に寝泊りして徹夜で飼育法を教えてもらう事になったらしい。だからオディナロとユノーとシェンレイが宿に泊まることになった。予定ではオディナロは故郷ユーラ領に帰るつもりだったようだが、先払いした宿賃が惜しくなったようで今夜は同じ部屋で寝るとのことだった。

ここに来るまでの馬車での長話のお礼にと、オディナロは小さな首飾りをユノーにくれた。それは大トカゲの牙だという。

それが何を意味するのかはユノーには分からなかったが、オディナロは「友情の証だ」とだけ言った。

ユノーはそれを受け取ると、ベッドの中でそれをじっと見つめながら自然に眠りに就いた。

翌朝、三人が宿の外に出ると既にガンスティールが馬車を用意していた。

「オディナロはユーラ領に帰るそうだが駅までは一緒だな」

ガンスティールは徹夜で話でもしたのだろう、昨日よりも多少やつれて見えた。

それから四人で駅に着くまでガンスティールは無言だった。

イサク城下町の駅でオディナロと別れてからもガンスティールは一言も喋らなかつた。

定期的に体を揺らされる機関車の客室の中で、ガンスティールはリトの工場での昨夜のやり取りを思い出していた。

「私の領主イサク様が調べたのは、まず今年のオムニバルで国王ア

ラクトに『満足なエルフィン』という料理を出した男についてです。その男の名はキーン・ヴァイオン、ウェルトウム大陸の遙か東方にあるエアルト大陸の神聖帝国サージエスの宮廷料理人だったそうです。

サージエスといえば、エルフィンを神の化身であるとして一切食わない事でも知っているでしょう。私たちからすれば不自然に見えるかもしれませんがそれが彼らの宗教なのです。非難するつもりはありません。その国の料理人である彼がどうしてもわざわざウェルトウムまで来てエルフィン料理を作り、こちらの国王に献上したのかは分からなかったようです。

ですが、なんでも古代人に関する資料にあつた料理を試してみたいとのことでした。自国では宗教上の理由からエルフィン料理が作れないですからね。料理人としての好奇心が一番の理由だったのかもしれないかもしれません。そうして彼が再現したという料理が『満足なエルフィン』だったというわけです。

彼は王都オルパスの秘密裏の支援の下、一年かけてその料理の為にエルフィンを飼育しました。初めの半年はエルフィンを活発に運動させて体力を付けさせて、残りの半年はエルフィンの首から下を地面に埋めて一日に三度も大量のイチジクを食べさせたのだそうです。運動できずに太り過ぎ、肝臓を病んだエルフィンこそが食材だったのです。

その飼育法をされたエルフィンの肉は臭味が染み付いてしまっても食べられたものではなかったそうです。確かに肉は食用にはなりませんでしたが、病んだ肝臓は舌の上で蕩けるほど柔らかく美味だったそうです。

それにしても贅沢な料理ですよ。エルフィン丸ごと一匹を使って大量の餌を与えて、結局内臓ひとつしか使えないのですから。なにより王がその料理を気に入らして、アラクトはキーンに莫大な褒美を取らせたとのことですよ。

その後キーンの姿を見たものはいないとの話です。彼がどうなっ

たのか。自国に帰って行方をくらませたのかもしれませんし」

まるで自分が見てきたかのようにリトは長々と語った。

「それならば何故、王都はその飼育法を教えずに満足なエルフィンなどという曖昧な料理名だけを私たちに伝えて献上するように言ってきたのでしょうか」

ガンスティールはこの八ヶ月の苦悩の種である核心について訊ねた。

するとリトは突然辺りを見回し、小さな声で耳打ちするようにそれに答えた。

「おそらく、王都はエルフィン農家をつぶそうとしているのかもしれません」

ガンスティールは耳を疑うよりも目の前の男を疑った。もしかしたらこのリトという男は極度の被害妄想に囚われているのかもしれないと思った。だがそのガンスティールの態度に臆する事も無くりトは続けた。

「信じられないのも無理はないでしょう。しかし王都の意思はひとつではないという事です。ある意思是王の暴食を許し、またある意思は暴食を理由に彼を引きずり降ろそうとしていると私は考えます。私たちにとってどの意思が良いのかはわかりません。しかし近いうちに国が荒れるのは確かです」

物騒な事を言い出した拳句リトは、

「気をつけてください、秘密警察が動いているとの噂もありますからね」

と締め括った。

彼が妄想狂でないとも言いきれない。ガンスティールからすれば秘密警察の云々は気にもならなかったが『満足なエルフィン』の正体には衝撃を受けた。

リトの言う料理が真の『満足なエルフィン』ならば、これまでの八ヶ月の間に自分がしてきた事は一体何だったのか。『満足なエルフィン』に対する自分の解釈の違いとユノーの今後の処遇について

思い巡らせた。

王都の意思でわざと間違ったものを作らされているのだとしたら、リトが言うように何らかの計略に巻き込まれている可能性もあるということだ。もし王都自身も例の料理について理解が十分でなく模索している最中なのだとすれば、曖昧な伝令の所為で間違ったものを作らざるを得なかったともなるが、はたして。

さらにリトは思い出したように、ウエルトゥム王国の二十四領地の各一戸の農家が同様の伝令により『満足なエルフィン』を作らされているということをつけ加えた。ガンステイルとリトはその二十四戸の内の二戸というわけだ。ガンステイルはこの八ヶ月間に何の疑問も持たずに受け取り続けた給金の出所が心配になった。自分には計り知れない謀略の意図が張り巡らされているのではないかという想像に空恐ろしさを感じた。

彼らに乗せた機関車はガーベント領に到着した。

## 第5話 疑心 5 - 1

### 第5話 疑心

「どう思う、ユノー」

ガンスティールはユノーに相談した。どうあってもユノーが死ぬような話を彼女本人に相談するのも奇妙な事だとは思ったが、何より彼女自身が相談するよう頼んできたので彼は正直に全てを話したが、ユノーは自分自身の生命の存続についてはまるで執着していないようだった。もっとも、そのように教育したのはガンスティールだったが。

なにより彼がユノーに相談したのは、彼女ならば何を言っても理解してくれるだろうという期待があったからだ。

ユノーは少し考えてから自分の意見を述べた。

「今からでも飼育法を変えることは出来るでしょう」

ユノーはあっさりと提案した。

「自覚症状はなくても既に私も脂肪肝を発症しているかもしれない。ですが、その方法が正しいのであれば試す価値はあると思います」

あくまで冷静にユノーは自身が最善と思う案を提示した。

「では、ユノーは首から下を埋められて強制的に食事を流し込まれるようになってもいいと言っのか」

ガンスティールはわずかに興奮してユノーに食いついた。

「お父様が今まで通り娘として愛してくださるなら、埋まっているかないかの違いでありません」

ユノーは正直にそう言った。エルフィン肉が食卓に並ばなくなっただとはいえ、ユノーの食卓はいつも溢れかえっていたからだ。

そのユノーの指摘にガンスティールの興奮はわずかに冷めたが、

機嫌は悪くなったようだ。

「ユノー、私にはお前が何を考えているのかわからない」

ガンスティールは抱えた不安を紛らわす為に自分からユノーにすがりついたはずだが、わざと彼女を突き放すように呟いた。

「お父様、わかつて貰えなくていいです。私はエルフィンですから諦念を露骨に声に出してユノーは応えた。ユノーからしてみれば、言動が不可解なのはガンスティールの方であつた。

だが、疑心暗鬼に駆られたガンスティールはユノーの消極的な反抗に対して過敏に反応した。

「私はお前の為を思つて言っているんだ、なぜ分らない」

そうして、声を荒げたガンスティールは大きく足音を立ててユノーの部屋から出て行った。

一人残されたユノーは、逃げる背中を見つめて呟いた。

「お父さんの、ばかり」

深い悲しみと僅かな怒りを込めて言つたそれは、彼を父親と認め得のささやかな反抗期だつたのかもしれない。

ガンスティールの精神的な恐慌状態は長く続いた。ユノーはいつもと変わらぬ態度で彼に接したが、むしろそれがさらに彼を逆上させた。

やり場のない怒りと不安を抱えるガンスティールの下に見過ごせないニユースが飛び込んだのは、リト工場訪問から三週間後。年が明けて間もない頃の事だつた。

ガンスティールの農場へ地元の町から通う従業員の一人が持ってきた新聞に書かれていたことは苛むさいなガンスティールに追い討ちをかけた。

ガーベントパブリッシング紙の伝えるところによると、昨年の暮れに領主イサクのマキシム領の精肉工場がエルフィン熱に感染し焼却処理されたのだという。ガンスティールはその記事を読んですぐにそれがリトの農場の事だと察した。

エルフィン熱とはエルフィン同士で空気感染する流行病であり、濾過性病原体によって引き起こされるといわれる。通常状態では人間に感染することは無い。しかしエルフィン熱にかかったエルフィンは全身に強毒性の毒素が貯蓄されるため、その肉を食べた場合は重篤なシヨック症状を起こすと言われている。蓄積された毒物はエルフィン自体には無毒なのだが風邪の症状が治まった後も分解される事が無い為、食用肉にはすることが出来ない。病原体の潜伏期間は二週間ほどであり、発症したエルフィンが発見された農場は即座に焼却処分され、その農場の周辺は広範囲にわたり長期間進入禁止になる。今回の件でも同様の処理がなされたが、問題の精肉工場がマキシム領の中心地にあつたことで交通やその他の機関に多大な影響が予想されるそうだ。その精肉工場の工場長は焼却処分される工場の中に飛び込み行方不明となつたとも伝えられている。

ガンステイルはその記事を読んだとき、恐ろしい想像が現実のものになつたと確信した。リトは『満足なエルフィン』の秘密を知りすぎてしまったのだ。そして秘密警察に捕まり、エルフィン熱というもつともらしい理由を付けられて暗殺されたに違いなかった。

もしかしたら、とガンステイルの思考はさらに悪い方へと流されていく。もしかしたら自分が彼と接触してしまつたのがいけなかつたのかも知れない。『満足なエルフィン』の伝令を受けた農家同士は交流してはいけなかつたのかも知れない。しかしそんなルールは聞かされていなかったとガンステイルは憤慨した。そして、次に消されるのは自分かもしれないと恐怖した。

それ以降、ガンステイルは常に何かに怯え、また他人に対して深い猜疑心を持って接するようになった。いつ自分が『秘密警察』なるものに目を付けられるか不安で仕方が無かつたのだ。ユノーに對しても心を開かなくなり、二人の関係は昨年のオムニバル直後の状態よりも疎遠になつていた。そうして次第にエルフィン舎に籠もるようになっていった。

一方のユノーは、そのようなガンスティールの態度に苛ついていた。エルフィン舎からなかなか帰ってこない彼を待ち侘びていつも窓の外を眺めていた。

彼女がエルフィン舎にいた頃などは、いつも書庫にこもって本を読んでいた暇つぶしも出来た。ユノーはエルフィン舎の書庫で、隠れて本を読むのが好きだった。読むのはどのような物でも構わなかった。

エルフィン舎の書庫は歴代の農場主が舎内で時間をつぶす為に外から持ってきた物であった。農場主がいない間に隠れて本を読むのは一部のエルフィンたちの娯楽であった。

ユノーが特に好きこのんで読んだのは幻想小説などのフィクションであった。架空という概念を生み出すフィクション作品に彼女は憧れを抱いていた。幻想小説の典型として「騎士が竜を倒し、囚われの姫君を助ける」といった作品を読めば、自分が囚われの姫君にでもなったつもりで心をときめかせたものだった。

そんな楽しい読書の時間も、この屋敷の中では楽しめない。

だからせめて、彼女はシエンレイと遊ぶほか無かった。

もつとも、シエンレイにとってはユノーで遊んでいるという程度  
の感覚だったようだが。

「ユノーさまつたら、また今日も旦那さまのことばかりみていらっ  
しゃったのですね。それといつにも増して不機嫌の様で」

「そうね」

ユノーの部屋には今、シエンレイとユノーしかいない。シエンレイは普段屋敷の中で仕事をする時と変わらぬ態度でユノーに語りかけていたが、ユノーは表情に翳りがあつた。

「ねえ、シエンレイ。『幸せ』って何かしら。『満足』になると『  
幸せ』になれるのかな」

唐突に、ユノーは言った。それはもしかしたら、誰に聞かせるつもりでもないただの独り言であつた。

「お父様は王都からの伝令で『満ち足りた生活を送ったエルフィン』

を飼育するように言われたそうだけど、それをすぐに『エルフィン  
を幸せにしる』と解釈してしまっているようなのよ。

『満ち足りる事』と『幸せ』とを同じだとお父様は思っている  
ということなの。

でもそれは完全にイコール、同一の物かしら。確かに、誰であれ  
満ち足りたと感じた瞬間と同時に幸せを感じることはあるでしょう。  
だけど欲求の不満足を満たしたとしてもそれは本当に一瞬の出来  
事。

穴の開いたコップが水を満たす事が出来ないように、満足の状態  
を維持すると言う事は不自然な事なのよ。

何らかの欠乏を感じたときにそれを満たそうとする衝動が起こる  
からこそ、満たされたときに充実感、幸せが発生するのではないか  
しら」

取り留めの無い妄言を紡いでいるだけのようなユノーを眺めて、  
シエンレイはため息をついた。

「ユノーさま。ややこしい話は私には分からないのですが、確かに  
今の旦那さまは様子がおかしいですね。国家的な陰謀やら、秘密警  
察やら、私はこの国にそんなものがあるとは思えません。まったく  
誰の入れ知恵なのでしょうね。それに」

シエンレイは一息入れて、こう付け加えた。

「秘密警察だなんて、童話の中にさえ出てこない無粋なものです」

ドミノ・オムニバルまであと二ヶ月に迫ったある夜、草むらの闇にまぎれてひとつの影がガンスティール邸に忍び寄った。硬く閉ざされた正門を避け、その両脇にある鉄柵の隙間から敷地内に潜入する。屋敷の蝋燭の灯が消されているため、中庭を照らすのは月の光のみであった。その月を厚い雲が覆ったとき、中庭さえも真の闇に閉ざされた。

その機を待ちわびたかのように影はゆっくりと中庭を走り抜け、屋敷の壁の赤煉瓦にぴったりとその身を添わせた。月が再び顔を見せた時その光は褐色の肌を照らした。

進入口を探す為その一人の影は屋敷の裏に回った。裏手にはエルフィン舎が遠く見える。見張り台が点々とそびえているのが見えなければ、影はそのままエルフィン舎に向かったかも知れない。だが影はそれをすぐに察知し屋敷を見回した。植え込みに身を隠し、息を潜めていた。

見張り台の回転灯が屋敷の壁を舐める様に照らしていく。薄暗闇の中に隠れていた影は、勝手口を見つけるとそこから屋敷の内部へ侵入した。

影の動きは遅い。しかし何らか明確な目的を持っているかのようにしつかりと、明かりが灯っていない屋敷の中を迷い無く動いていた。まるでどこに何があるのかを把握している様子だった。

やがて影はある部屋の前にたどり着く。そこは、かつてこの屋敷の主人が恋人を住まわせていた部屋だった。今では主人の娘の部屋となっているが、そのことを影が知るはずも無い。

力ない手がその部屋の扉を開けた。

「誰」

扉の正面にある窓辺から、現在その部屋の住人である少女の声を聞く。月明かりから陰になっているので部屋の中は照らされなかつ

だが、見張り台の回転灯が一瞬だけ部屋の中を横切った。

「あなたは」

窓辺の少女は、部屋の中に突然現れた影の正体をしっかりと確認してしまった。

リトの工場で給仕をしていた長白髪の耳無しエルフィン、レナだった。

ユノーは驚いた。そのはずである。目の前に現れたのは皆殺しにされたはずのリト精肉工場の給仕として働いていたエルフィンだったのだから。その姿を確かめようとユノーがランタンに灯をともすと、その彼女は炎に反応してひどく怯えた声を上げた。

「あ、あ」

灯の光を避けるように彼女はユノーに背を向けた。かつて背中のみりまであった長い白髪が肩の辺りまで焦げて無くなっていった。体を隠すように巻きつけられた黒いローブの下から覗く手足には高熱で溶けたと思われる衣服が皮膚にめり込んでいた。

「お願い、消して、その火」

その懇願する横顔は皮膚が引きつれたまま固まっている。ユノーは言われたとおりランタンの火を消した。再び部屋は闇に包まれる。一度強い光を見てしまったのでよりいっそう暗く感じられた。

レナが何も言わずくまってしまうたので、ユノーはどう扱っているのか思い悩んだ。彼女は何をしにここまで来たのだろうか。火傷を負っているようだがこれは例の焼却処理の時の傷なのだろうか。ユノーには分からない。

「ねえ。出てきて」

ユノーは優しく声を掛けてみた。彼女に害意があるのであればすぐに襲われているだろうから、それをしないところを見るとレナは助けでも求めに来たのだろうとユノーは解釈した。

「ね、何もしないから」

レナが隠れた物陰に向かって声を掛ける。返事がないとまるで一

人芝居のようだとユノーは思った。

様子を伺うかのような沈黙の後、物陰からか細い返事が聞こえた。  
「わかりました」

レナは体力的に弱っていたが怯えているわけではないようだった。ゆっくりと立ち上がり、窓際のユノーのところへ近づく。

「レナさん。何故ここに来たのでしょうか。あの工場は、リトさんはどうなったのか、教えていただけますね」

訊きたい事は山ほどあるがユノーはとりあえず彼女の目的を知りたかった。遠く離れたガーベント領まで来たのは何故なのか訊ねてみる事にした。

レナはなかなか答えてくれなかったが、少しずつ打ち明けていった。

「昨年の暮れに、エルフィン熱を発症したものが農場で発見されたのです。リト様はすぐに問題のエルフィンを処分して様子を見ました。その時には既に多くの食用エルフィンが感染していました。通常であれば発症したエルフィンのいる区画だけを隔離すれば済むはずだったのですが、どうやら従業員として働いていた者が病原体を運んでしまったようで、取り返しのつかない状態になっていました。すぐに衛生局の者がやってきて、有無を言わず工場を周囲の民家ごと丸焼きにしました。私はちょうど買物に出ていたのですが、焼かれている工場の中にリト様がまだいることを知って工場の中に駆け込みました。工場の中には耐熱服を着た衛生局の者が残っていて、耳が無かった私は人間と間違われてすぐに外に連れ出されました。火傷はそのときに負ったものです。焼け崩れる工場からは」

レナは怯えながらも長く話を続けたが、体力が尽きたのか途中で途切れて倒れこんでしまった。慌てて抱き上げるとレナは静かに寝息を立てていた。

結局大事な事を訊く前にレナが寝込んでしまったので、ユノーは一旦彼女を休ませることにした。火傷の傷は乾いているようなので

薬は要らないだろうが、成人したエルフィンを安全に運ぶ体力はユノーには無かったのでも誰かの力が必要になった。

意を決し、ユノーは現状で信頼するに足る人物としてシェンレイに助けを求める事にした。

深夜であるにも拘らず、シェンレイはレナのために部屋を探した。といっても屋敷はそれほど広大というわけでもなく使用されていない部屋が少ないので、とりあえず寝る事だけは出来る屋根裏部屋を用意した。

ユノーはシェンレイと共にレナをその部屋に運び、このことを誰にも言わないようにと約束を求めた。シェンレイは何の異議も申し立てずにそれに応じた。ユノーはそれに安心し、その日は寝る事にした。

## 第6話 裏切 6 - 1

### 第6話 裏切うらぎり

朝、夜が明けてからユノーはこっそりレナの様子を見に行った。レナは屋根裏部屋に置きっぱなしだったベッドに横たわり、今もまだ寝ている。真横から差し込む陽の光の下でレナの顔を改めて見ると、火傷痕が痛々しいのに加えて酷くやつれている様に見えた。狭い部屋の中を見回すと、ユノーは白い布をかけられた四角い板のようなものがある事に気づいた。

なぜかユノーはそれの中身を見たいという衝動に駆られた。

恐る恐るその布に手をかけると、一息にそれを払いのけ、隠された物を白日のもとに晒した。

そこにあつたのはユノーが期待した通り、ある者の肖像画だった。外見はユノーに似ている。しかし、そこに描かれた者が着ている服はユノーが一度も着たことが無いものだった。

ユノーには、そこに描かれている者が一体誰なのかはつきりと理解できる。そしてなぜか、懐かしいという感情がユノーの胸に満たされた。

『やつと、見つけた』

ユノーの脳裏に弱弱しい声が響いた。それはエルフィンが生まれながらに持っている、他者と精神を共有する力によるものだった。

今のユノーには、そこにいるレナの感情がはつきりと理解できる。レナは今、愛する者に身を委ねる様な安堵に包まれていた。

リトの工場からここに来るまでほとんど何も食べずに疲れ果てているようだとも感じる事が出来た。

そこで何か食べ物でも持って来ようとユノーが屋根裏部屋を出ると、入れ違うようにガンスティールが入っていった。

「あ、お父様」

ユノーが制止する間もなくガンスティールは屋根裏部屋のベッドに近づく。そしてすぐに引き返した。何か重そうなものを引きずっている。彼が部屋の外に出た段階で初めて分かったが、彼が引きずっていたのはレナだった。焦げて短くなった白い髪を掴んで引きずっていたのだ。

レナは苦悶の表情で髪を押さえるのがやっとの様子で、起き上がって抵抗しようとはしなかった。

ユノーがガンスティールを止めようとするも彼は有無を言わさぬ歩みで彼女を振り切った。廊下から階段へ引きずられた際に体を段差に打ち付けるレナの姿を、ユノーは直視できなかつた。それでも何とか食い下がろうとレナの体にしがみついたが、彼が歩みを止めない為にそれはレナが痛み顔に顔を歪ませるだけだった。

屋敷とエルフィン舎の間の野原でレナはやっと解放された。

そして間もなく、耐火服に身を包んだシエンレイが現れる。背中に円筒形のタンクを背負い、そこから伸びる金属製のホースを脇に抱えていた。火炎放射器である。エルフィン熱撲滅のために、とガ―ベントではエルフィン農家と保健所のみが所持を許されていた。

「シエンレイ、どうして」

ユノーは憤りシエンレイを責め立てた。しかしシエンレイは無反応である。

「お父様、どういふことですか」

ガンスティールも何も言わない。

心の均衡を失った彼にとって今すべき事は『エルフィン熱の疑いのあるエルフィンを焼却処分する事』である。エルフィン農家として当然の行為を止めようとするユノーの事が今の彼には理解できなかった。

彼が右手で小さく合図をすると、シエンレイがホースの先をレナに向ける。

ユノーは咄嗟にシエンレイの前に立ちふさがった。そんなユノー

を制したのは、レナだった。

「やめなさい、ユノー」

レナは上半身だけを何とか起こしてユノーを呼び止めた。強く引っ張られた髪は部分的に抜け落ち頭皮がまばらに見えている。段差で打ち付けたのか背中への火傷が破れて血がにじんでいる。

「当然のことなのよ。エルフィン熱の出た農場のエルフィンは全て焼き殺さなくてはならない。そうでないと病が蔓延してしまうから人間は、エルフィンという種を繁殖させることを無意識下で義務付けられているの。彼は古来の契約を果たそうとしているだけ」

そう言つて、私は大丈夫だからとにっこり微笑む。

「殺されると知っているのならば何故ここまで来た」

ガンスティールが口を開いた。レナは無表情に戻りそれに答えた。「だって、あなたに会いたかったから」

レナはガンスティールに近づこうと地面を這つたが、彼の足元まで来たときに一蹴されて後方に倒れた。

「痛いわ。ねえ、ガンスティール。あなたの前から消えた私を今も憎んでくれているのかしら」

ガンスティールは応えない。

ユノーは思った。様子がおかしい。まるで二人は工場で会う以前から見知っていたかのような会話だった。

「ねえ、あなたの悪いところは、自分が悪いという自覚が無い事」

ユノーがおかしいと思つたのは、レナがガンスティールを親しげに呼ぶ事だ。これではまるで、この二人はかつて恋人同士だったかのようだ。

「ユノー、あなたは子を残さず死んでしまふのね」

レナはユノーを見て、再び優しく微笑むと立ち上がつて言った。

「ガンスティール、私を殺しなさい。これでようやく私はあなたの呪縛から解放されるわ」

両手を広げ、無抵抗を表した。

「ねえ、わたしはあなたを」

レナは紅い瞳をガンスティールに向けた。その紅い色はユノーの瞳と全く同じ色だった。

レナの褐色の肌は、肥えやすいエルフィンを産む品種の母体として特徴的な色だった。

レナの白い髪は遺伝的な突然変異であり彼女特有のものだった。もちろん彼女がかつて生産したエルフィンも全て白髪だった事だろう。

ユノーは、彼女が何者であるかを知ってしまった。

ガンスティールは右手で小さく合図をした。ユノーを押しつけて前に出たシェンレイが火を放った。紅い炎は一瞬でレナを包んだ。

「ずっと愛していたわ」

レナはそれ以降喋る事は無かった。なぜならその直後彼女は黒い炭になったからだ。

炎が止まると人型の炭は前のめりに倒れた。炭の表面が割れ、生焼けの肉が隙間からこぼれた。

ユノーは母親の死体を見て気を失った。

ガンステイルは憤慨した。何故こうも自分を危機に追い込もうとする意志が働くのか。

彼は近日中に彼に降りかかった事を思い返した。リト工場を見学してからというもの悪い事ばかり起こっていると感じていた。『満足なエルフィン』がまちがいであったこと、王都の謀略に嵌められたと感じていること、秘密警察に追われていると感じていること、リト工場がエルフィン熱に侵されて焼却処分になったこと、エルフィン熱にかかっているかもしれないエルフィンが屋敷に侵入していたこと、そのエルフィン・レナの正体がかつて自分の農場で飼育されていた繁殖用エルフィンだったことなど。

ガンステイルにとつて見過ごせない問題がある。エルフィン熱に侵された可能性のあるレナが自分の屋敷に侵入してきたこと、そしてユノーに接触した事である。

レナが言うように彼女がただガンステイルに会いに来たとは彼には思えなかった。

レナは確かにガンステイルの農場で飼育していた繁殖用エルフィンだ。ユノーの直接の母でもある。リトの精肉工場から焼け出され、かつて逃げ出したガンステイルの農場に戻ったとしても、今のガンステイルにはそこに何らかの陰謀を感じさせる余地があった。

そしてガンステイルは確信した。マキシム領主イサクが何らかの報復のためにレナを送り込んだに違いないと。彼はすぐにその『事実』を訴え出る事にした。まずは彼のガーベント領主マハエルの下へ。

結果から言うと、領主マハエルは一切ガンステイルに取り合っ  
てはくれなかった。彼が領主の城に着くなり自らの主張を喚き散ら

したせいかもしれない。しかし彼にとつては緊急の事であり一刻も早く領主に伝えたいと思つた末の行動であつたから、理解されない事に憤りも感じていた。彼は一週間ほど粘つたが、「二カ月後のドミノ・オムニバルでは王に粗相の無いように」との忠告を貰つただけであつた。

失意のガンステイルが屋敷に戻つたのはレナを処理してちょうど二週間後の事だつた。彼が屋敷に到着するなり、彼の執事が慌てて言つた。

「ユノーさまが体調を崩されました」

予期していた事だつた。そして、そうなつて欲しくない事であつた。予期し恐れていた事だからこそガンステイルはそれをすぐにエルフィン熱であると解釈した。

彼はすぐ倉庫に向かおうとした。倉庫には火炎放射器がある。エルフィン農家としての義務感が起こさせた行動だつたが、すぐにそれを思いとどまる。

「私にユノーが殺せるだろうか」自問するが、答えは明白だつた。そんな事は出来ない、あれは国王に献上する為のエルフィンなのだから。

エルフィン熱であれば、ユノーを隔離さえすれば問題は無かつた。屋敷とエルフィン舎を行き来するのはガンステイルだけであつたので、彼さえユノーに接触しなければ病原体が蔓延することも無いだろうと思つた。

しかし、彼は迷つた。もしユノーがエルフィン熱にかかつたのであればもう献上することは出来ない。たとえ治つたとしても彼女の体は毒物に変質してしまつていゝるであろうから。

ガンステイルが今までユノーを育ててきたのは義務感からだつた。聖誕祭の準備会から指示され、王に献上するために彼女に尽くしてきたのだ。彼女に愛情を注ごうと勤めてきたのも全ては王に献上する為だ。その義務感、職務意識が全てだつた。ユノーを幸せにしようと思つたのも、幸せなエルフィンが美味しいという指示が

あつたからだ。もつともその指示は彼の誤解であつたが。

それが今まで、ガンスティールが十カ月にわたつて行つてきたことの全てだ。だがそれも、疾患という形によつて崩れ去ろうとしている。いや、全て崩れ落ちた後なのかもしれない。毒と化したエルフィンを献上すれば反逆罪で捕まるだろう。そうなれば彼は農業貴族としての信頼も地位も財産も一度に失う事になる。たとえそうでなくとも彼には毒物を他人に差し出す事などできなかつた。

義務感に裏づけされた愛情であつたがために多くの矛盾を孕んでいた事だろう。しかし今、リトの妄言によつて王都への不信感を抱いていた事と、どうあつてもユノーを王に献上することが出来なくなつたことからガンスティールは再び決断しなければならなかつた。彼にとつてユノーが何であるか。

王に献上する肉だろうか。今や彼女の体は毒である。肉ではない。彼の娘だろうか。そうであるなら今までの偽りの愛情はどう説明するのか。

今こうしている間にも病魔はユノーを蝕んでいる。迷っている暇は無かつた。

保身か、それとも。

彼は、決断した。

「ユノー」

ガンスティールがユノーの扉を開けると、老齡の給仕エメトが彼女を看病していた。

「旦那さま、来てはいけません」

エルフィン熱自体が人間に感染する事は無いが、その病原体が衣服について二次感染する事もある。エルフィン舎を取り仕切るガンスティールがその危険を冒すことは出来ないはずだつた。

「私が代わる。農場のものには後は頼むと伝えておいてくれ」

ガンスティールは濡れたタオルを給仕から奪うと、よく絞つてユノーの額に当てた。

そしてエメトを部屋から追い出し、ユノーのベッドの横にひざまずいて注意深く彼女を観察した。彼に医学の知識は無い。また農場で病気にかかったエルフィンはずくに焼却していたのでエルフィン熱がどのような症状なのかは詳しく分からなかった。

それでも自分のできる限りをしなければと、ひたすらユノーを看病し続けた。

額のタオルが温くなればすぐに取り替え、咳き込めば背や腹をさすってやった。それ以上のことができない自分を不甲斐無く思いながらも、ただひたすらに彼女の回復を願った。

汗に濡れた服を取り替えるとき、やつれた彼女の体を見てもその肉の味を想像する事も無くただその苦しみを和らげる事が出来ればと願うだけだった。

ガンスティールは思った。どうすればユノーを少しでも長く生きながらえさせる事が出来るだろうか。

ユノーの症状は回復しなかった。

オムニバルまであと一ヶ月という時期にあつても、まるでそれを忘れたかのようにガンスティールは全てをかけてユノーを世話し続けた。

エルフィン舎の指揮はガンスティールの執事が代行しているらしい。それでも経営が間に合わず、農場は傾きかけていた。主人の狂気を予見した給仕二人と料理人は早々に彼の屋敷を引き払っていった。いま屋敷に残るのはユノー、ガンスティールのほかに給仕のシエンレイとエメトのみである。屋敷は早くも荒廃していた。

ガンスティールはシエンレイに命じて獣医を呼ばせる事にした。獣医はマハエル城下町にしかないようだがそれでも構わない、とシエンレイに多額の金を渡し城下町へ行かせた。幸い給金は多く残っている。もし彼女がそれを持って逃げたとしても構わなかった。シエンレイはすぐに馬車で城下町へ行つた。今から行けば一週間後にはこちらに戻ってくるだろう。

ガンスティールがシエンレイを見送つた後部屋に戻ると、苦しげなうめき声が聞こえた。今まで声も上げられなかっただけに、わずかも回復したかと思ひ彼はベッドに駆け寄つた。

ベッドの上ではユノーが汗にまみれ、もがいていた。ガンスティールは彼女の手を取り必死に励ました。あと一週間で医者があると、それまで耐えてくれと。

ユノーは視界の中にガンスティールを見つけると、その顔へ手を伸ばそうとした。だが力ないその手は届かない。

ガンスティールが顔を近づけ、彼女の手を取り自分の顔に触れさせると、ユノーはうつすらと笑つたような顔になった。

「ごめんなさい、お父様。これでは王様に献上できませんね」

かすれた声が聞こえたが、ガンスティールはそれを否定した。ユ

ノーがそんな事を言うはずが無いと思いたかった。

「ごめんなさい、お父様。私の体を王様に食べてもらえなくなってしまうって残念ですか」

ユノーは息を荒くしながらそれでもガンスティールに語りかける。彼女の手がガンスティールの頭を撫でた。彼女なりに慰めようとしているらしい。

ガンスティールは彼女の言葉に涙を流すばかりだった。ガンスティールが今までユノーを献上物としてしか扱っていなかったように彼女自身も自分をただの献上物としてしか見ていなかった。ユノーは自分を好く扱ってくれるガンスティールにそれなりの愛情を感じてはいたが、結局のところ彼を父親として信頼などしていなかったということだ。彼をお父様と呼ぶのも、そう呼ぶようにと命じられたから彼の前で言っていただけだったのだ。

ガンスティールはいよいよ自分の偽善に気付いた。しかしそれは遅すぎた。「父親として愛してやっている」という驕りでは、娘としての彼女からの信頼などは得る事が出来なかったのだと気付かされただけだった。

彼が悔やんでも、ユノーは謝罪をやめない。彼女はただガンスティールの一年間の努力を無にしてしまった事を謝罪するのみである。今さら心を入れ替えたと言って見せたところで、ユノーはそれを信頼しまい。

ガンスティールからすれば、ようやく自分の誤りに気付いたというところだ。その今の自分の改心を、今までの自分の行いによって否定されていた。

ガンスティールの心の中には、ユノーを失いたくないという思いが芽生えていた。しかしあと一ヶ月で彼女は王に食われてしまう。ガンスティールは今の自分には何も出来ないと感じた。それでもユノーに未来を与えたいと願った。ユノーがエルフィン熱によって毒物と変わってしまったのなら、王に献上はしなくても済むかもしれない。しかし同時にユノーは焼却処分されることになるはずだ。

ガンスティールは考えた。そしてすぐに道を見つけた。

「ユノー、私と一緒に逃げよう。どこか遠く、エアルト大陸へ亡命すれば生き延びる事も出来るかもしれない」

ガンスティールはユノーを抱き起こして、言った。

エアルト大陸に行った事は無いが、そこならば宗教上エルフィンを手厚くもてなしてくれるはずだ。幸い逃亡するだけの金もある。屋敷に残った給仕を連れて行くことも、退職金として金を渡す事も出来る。

だがユノーは、自分の思いつきに興奮するガンスティールをなだめて言う。

「お父様、私の幸せを奪わないでください」

ユノーはかすれた声ではっきりと言った。

「どういうことだ、ユノー。もう食われなくて済む。死ななくていいんだ。逃げよう、二人で」

「嫌です」

ユノーはガンスティールを拒んだ。

「私の幸せは、食べられる事です。お父様が私を幸せにしたいというのなら、私が食べられる事を止めないでください。私は食べられる為に生きてきたのですから」

ユノーは、食べられる事が幸せなのだと言った。

もちろんガンスティールには理解できない。それがエルフィン舎で行ってきた自分の教育の成果だと喜ぶ事も出来ない。

「しかし、ユノー。お前はもう食用には出来ないんだ。病にかかってしまったから。もう献上される事もないんだよ。だから私と」

「なら、お父様が今ここで食べてください」

右手を伸ばしてユノーはガンスティールの言葉をさえぎった。そして、彼女の親指をガンスティールの口の中にねじ込んだ。

それと同じ光景を、かつてガンスティールは見たことがあった。それはおよそ十四年前、ガンスティールの母が屋敷を出て行つてすぐのこと。当時ユノーはまだ生まれていなかったからこの農場での出来事は知らないだろう。

その時はガンスティールの父親が農家として現役であり、息子の不始末をどのように隠匿するかで騒ぎ立てていたのだった。

ガンスティールは当時十六歳で、農場の繁殖用エルフィンを屋敷に匿い愛し合っていたことがついに暴かれたのだった。

「嫌だ、行かないでくれ。俺には君が必要なんだ」  
若かりし彼は、家畜相手に愛を語り、泣きついた。

取り乱す彼に対して、当時のレナは冷たくあしらった。もちろん彼女は彼女なりに自分の立場をわきまえていたから、そうすることが真つ当であると考えた故の演技であつた。

彼は人間、彼女はエルフィンであるから、その恋愛が周囲に認められるはずがないということをガンスティールだけが理解できなかった。

彼女は、彼が自分を憎めばいいと考えていた。農場のエルフィンと恋愛の真似事をするよりも、人間は人間同士で結ばれたほうが幸せになれるはずだと、きわめて常識的に彼女は判断した。

「聞き分けがない人ね。あなたが私を抱いたのは、私と子どもを食べる為だったでしょう」

ガンスティールは当時、愛の行為ゆえに授かった彼女との赤子を誰にも気づかれずに処分する為、それをすべて食べていたのだった。その肉の味を覚えてしまった彼は、執拗に彼女を抱き、出来た子どもを食べた。エルフィンと人間との子どもはこの世に存在しない

事になっていたので、彼がそれを食べたとしても誰もそれを咎める事は出来なかった。

彼女は彼の父親の計らいで、別の領地の農場に送られることとなっていた。ある精肉工場ではエルフィンが労働者として生きることが出来ると聞いていたので、彼女はそこに引き渡すことにした。彼の父親はエルフィンに対する敬意と愛情を忘れぬ人であったから、彼女の為に新しく生きる道を考えての決断だった。

若きガンステイルは相変わらず泣き喚くだけだった。彼女は彼に苛立った。そして思わずこう言った。

「別れたくないなら。それほど私と一緒に居たいなら、今ここで私を食いなさい」と。

そして彼女はしゃがみこんだままのガンステイルの泣き顔を覗き込むと、彼の口に自分の右手親指を挿し込んだ。

ガンステイルは彼女の指を食えなかった。

彼女は結局、彼を放置して屋敷を去った。

ガンステイルは後日、彼女が精肉工場に送られたことを聞き、もう二度と会えないものと思った。自分の手元からいなくなった彼女を激しく恨んだ。

だが彼女は生き延びていた。そして、ガンステイルに会いに来たのだ。

彼女はガンステイルに助けを求めているのだろう。レナは死ぬ瞬間までずっと、自分はガンステイルから愛されているものと思っていたのだろうだから。

ガンステイルは今になってそれらを理解した。ガンステイルはレナを憎んでいた、今それらを理解したからといって彼女を再び愛せるわけでもない。

しかし彼女はガンステイルを愛していたのだ。

彼女が命をかけてガンステイルの気持ちを確認かめに来たように、彼も今確かめなければならぬ。

ガンステイルとユノー、お互いが相手をどう思っているのか。

どう信頼し、どう愛し愛されているのかを。

「さあ、早く」

過去を思い出し呆然としていたガンスティールに対し、ひと思いに噛めとユノーは促した。

ユノーの指を咬えたままガンスティールは強張った。彼女の体が毒であるなら、彼も死ぬ事となる。しかし、それならばそれでも構わないと彼は思った。

彼は指を押し込もうとするユノーの腕を掴んだ。押し出す為ではない。噛み千切るときに逃げない様にだ。

ガンスティールが顎に力を込める。それだけでユノーの親指はあっさりと切断された。

「んっ」

ユノーが息を詰まらせる。しかし声は出さなかった。

ガンスティールの口の中に鉄の味が広がる。それは彼女の親指に通っていた血の味だった。

親指を舌の上でしばらく転がしていると、次第に血の味は薄れてきた。

ガンスティールはゆっくりと味わいながらその指を咀嚼していく。ある程度噛むと親指の中から何か硬いものがズルリとこぼれた。

それは指の骨だ。ほぐれた指の肉を噛みしめると共に、彼は指の骨を噛み砕いた。骨の中を通っていた液体の味がする。骨は細かく砕かれ、すぐに飲み込まれた。ほどけて指の形を失った肉も、飲み込まれて喉を通過した。

ガンスティールは今までに食べた事が無いほど美味いと感じた。それが何故なのかは分からない。一年間かけて飼育してきた結果なのだろうか。この一年間は彼女にとって幸福だっただろうか。いや、幸福を感じたエルフィンが美味しいというのは結局迷信だったのでは無いか。

ふと、ユノーの顔を見る。彼女は恍惚とした表情で、自分の指を

食べ終えたガンスティールを眺めていた。

「なんだ、やはり幸せなエルフィン肉は美味しいのだなと納得し、次の指を食べようとしたとき突然、部屋の扉が開いた。」

「ガンスティール・ビノシエ、公金私的流用の罪で逮捕する」

王都からの令状を掲げて部屋に踏み込んだその男は、彼の友人才ダイナロであった。

## 第7話 追憶 7 - 1

### 第7話 追憶

屋敷の前には既に囚人用の馬車が停まっていた。その御者は口の周りを血で染めたガンスティールを見て怖気づいたが、すぐに引きつった笑いを浮かべて言った。

「嬰兒食いのビノシエ、また会ったな」

御者の言葉にガンスティールは何も言わず、自らその檻の中に入った。

ただ一人屋敷に残されたエメトに見送られ、ガンスティールの馬車は前後を王都秘密警察の馬車に囲まれて出発した。

ガンスティールの馬車の御者台には二人の男が座っている。御者とオディナロだ。

つまり彼が恐れていた秘密警察は実在したのだ。そしてオディナロがその一人だった

「四年前から、王都の依頼でお前を監視していた」

オディナロは自らの正体をガンスティールに打ち明けた。彼らが知り合ったのは四年よりも前であるから、ある時からオディナロからは裏切られていたのだという事になる。

「さて、ガンスティール・ビノシエ。自分とエルフィンとの子どもは美味かったか」

オディナロは、返事の無い檻の中に向かって勝手に語り続けた。

「分からないのか」

「そんなはずは無いよな」

「お前はかつてエルフィンに子どもを生ませて食っていたそうじゃないか」

「その頃のことを思い出したのだろう」

「それでまた食べなくなったのだろう」  
「自分とエルフィンとの子どもを」

馬車はマハエル城下町から鉄道に乗り換えられた。

鉄道の貨物車両に囚人馬車ごとガンステイルは押し込められた。車両の中にはオディナロが見張りとしてついてきている。

ガンステイルは何一つ話すことなく檻の中にいた。

機関車に特有の振動と慣性で吐き気のする車内で、オディナロは再び話し始める。

「人の形をしているが人ではないもの、それがエルフィン・ハーフか」

「それを食べたとして、誰もお前を裁けないだろう」

「エルフィン・ハーフは存在しない事になっているからな」

「そもそも、人間は共食いをする種族だったから、おかしいことではない」

「今でこそ禁じられているがかつては人が人を食った時代があった」

「俺だって、無性に人間を食いたくなる時がある」

「恐らく、俺たちはそういう生き物なのだろう」

「だが人間は共食いによる自滅を避けるためにエルフィンの養殖を始めたんだ」

「今は誰だって、人肉を食いたくなったらエルフィン肉を食うさ」

「お前は耐えられなかつたんだろう、人食いの衝動に」

「より人間に近いものを食おうと、農場のエルフィンに自分の子どもを生ませてな」

「もっとも、おまえなんかより悪い奴はいくらでもいる」

「わざわざ人を殺して食う奴もいるぐらいだからな」

「お前が年に一回の楽しみだけで満足していたのはマシだったのかもしれないな」

「その相手は、どう思ったかな」

「自分の子どもを食べていたお前を見たら」

「なあ、ガンスティール」

「リトの工場にいたエルフィン、あれがお前の」

「いや、いい」

「さあ、降りるぞ。ここが終着点だ」

「お前の、な」

王都オルパスは、三週間後に控えたドミノ・オムニバルへの熱気に包まれていた。

貨物車両から降ろされた馬車の中で、ガンスティールは笑っていた。エルフィン熱に冒された肉を食べた時から死を覚悟していたが、いまだに生きているという事実が愉快でならなかった。

そして、ガンスティールがかつて渡した友情の証を身に着けていないオディナロの姿を見て、再び笑った。

「リトを殺したのは、お前か」

死者が地の底から呼ぶような声でガンスティールがオディナロに尋ねる。

「あそこは俺の管轄外だ。俺の狙いはお前だけだったからな」  
当然だとオディナロは言い、御者台に乗りこんだ。

「ガンスティール、知っているか。リトはエルフィンだった」  
そんなこと、とつくに知っていた。

「奴自身が他所から病気を運んでいたんだよ」  
なるほど。

ガンスティールの身柄は王都司法に委ねられた。

司法官は留置所にガンスティールを案内した。

もちろん裁判はすぐには行われない。

ドミノ・オムニバルが近いからだ。

今のガンスティールの罪は公金の私的流用。

これは彼の意思に関わらず必ず罪に問われる事だったようだ。なぜなら、留置所には二十三人のエルフィン農場主が入れられていたからだ。

二十四人目であったはずのリトはもういない。

ここにいるものは全て、ドミノ・オムニバル準備会から助成金を給わって王に献上するエルフィンを飼育させられていた者たちだった。

その中で、王都の財政に詳しい者が事情を説明した。

「王都は今、財政難に見舞われている。というのも、かの暴食王アラクトの食道楽が原因だ。彼の食欲を満たす為に王都オルパスの市民は過酷な税金を強制させられている。王都の中で対立している勢力は二つ。国王の食道楽を擁護するアラクト派と、アラクトを王位から引きずり落とそうとする反アラクト派。ドミノ・オムニバル準備会はアラクト派だ」

その男は説明を続ける。

「この一年間、アラクトの『食費』は急増した。ここにいるものなら分かるように、『満足なエルフィン』『左手の埋葬』『エルフィン・ハーフ』といったエルフィン料理の研究が進められていたからだ」

男が今言ったものの全てをガンスティールは理解できなかったが、それらのいずれかをここにしているものが指示され作られたのだろうと理解した。そして他の者も皆、莫大な給金を与えられてきたのだろうとも分かった。

「いよいよ財政は悪化した。そこで反アラクト派は秘密警察を雇い、二十四の各領地でエルフィン農家を調査したということだ。助成金はどう使ってもいずれ王都に連行されるものらしい。反アラクト派からすれば、アラクトのために料理を研究する事自体が国家に対する反逆だという理屈になるからな」

ガンスティールはリトの言葉を思い出した。確かに彼の言っていた事はある程度当たっていた。そして、なぜ彼の言葉をもっとよく理解しこの日のために対策を練っておかなかったのかと悔やんだ。ガンスティールは他人からの言葉をただ聞くだけで、その言葉について調べようと努力をしてこなかった事を悔いた。

その時、他の男たちが声を上げた。先ほど中心で話をしていた男と揉めている様だ。

誰彼かまわず言い争いを始める。

「それじゃあ、俺たちはどうすればよかったって言うんだ」

「準備会の言うとおりエルフィンを飼育すれば秘密警察に連行され、エルフィンが上質に育たなかったらオムニバルでアラクト王に処刑させられるだろう。理不尽だ」

「そうだ、準備会から目を付けられたのが運の尽きと言うほか無い」

「いや、対立勢力の板ばさみになっているだけだ。決着がつけばどちらかに助けてもらえる」

「じゃあ何か。どちらかの決着が着くまで俺たちは両方から目を付けられているのか」

そこにいる二十三人、ガンステイルを除いた二十二人はそれぞれ自分の身に降りかかる不幸を嘆いた。

その喧騒の中でガンステイルは静かに時が来るのを待った。破滅でも救済でもいい。現在から抜け出すものが欲しかった。

その日の夜。一通り議論を終えて気が済んだのか、そこにいたものはみな口数が極端に減っていった。

誰もが、この一年間を思い出しているようだった。

それぞれがそれぞれの愛し育てたエルフィンの身を案じているようだった。

ガンステイルもユノーを思い出した。

あの日ガンステイルはユノーの肉を食べた。しかし彼は今こうして生きている。

ユノーはただ体調を崩しただけだったのだ。それを勘違いしてあれこれ思案していたのかと彼は脱力感に見舞われた。そして同時に、希望がわいた。

ガンステイルはユノーを連れて逃げる事を諦めてはいなかったのだ。

彼は救済を望む事にした。

三週間後、彼らは釈放された。国王の恩赦だった。  
そして、ドミノ・オムニバルが始まった。

## 第8話 終焉 8 - 1

### 第8話 終焉 しゅつえん

ガンスティールらのエルフィン農場主が解放されたのは、ドミノ・オムニバル開催の二日前。

準備会の者が手回しをしていた。それぞれの農家の自慢のエルフィンが国王の宮殿に集められていた。そして、それぞれの農家はドミノ・オムニバル十日目のメインイベントでのゲストとして宮廷内に控え室があてがわれていた。

釈放された夜、ガンスティールは宮廷の使用人に案内されその部屋に行った。

「旦那さま、ご無事で」

『ガンスティール・ビノシエの控え室』では、給仕のシエンレイが彼を迎えた。

彼女は逃げなかった。もちろん、主人の娘であるユノーを救おうと獣医を呼びに行ったのだった。

「エメトさんはお屋敷で旦那さまの帰りを待ち侘びていました」

シエンレイ、エメトは彼を見捨てなかったのだ。

我儘なエゴイストであった、それでも彼女らは彼を主人として仕えていたのだった。

そしてシエンレイは控え室の窓際を指差す。

緑色のドレスを着た少女がそこにいた。褐色の肌、白く長い髪、振り返り見つめあった瞳は、透き通った紅。

「ユノー」

ガンスティールは駆け寄り、ユノーを抱きしめた。

ユノーも彼の背中に手を回し、彼にしがみついた。

「お父さん」

彼を『お父様』ではなく『お父さん』と呼んで、ユノーは顔をぐしゃぐしゃに歪めて泣き出した。

「良かった、生きていて」

ユノーは自分の肉を食べたせいでガンステイルが死んだものと思っただろう。そのためシエンレイの連れてきた獣医によって回復し、屋敷に彼がいないと知ると酷く荒れたのだという。

シエンレイが泣きじゃくるユノーをなだめながら、そのいきさつを話した。

「お父さん、もうどこにも行かないで。私はずっと、お父さんと一緒にいたい」

ユノーは涎と涙で濡れた顔をガンステイルに押し付けて彼を抱き締めた。

その時である。

控え室の扉が開かれ、衛兵が二人入ってきた。

何事かと身構えると、その二人に守られるように一人の男が部屋に入ってきた。

見覚えの無い老人である。しかし、その禿げ上がった頭部に乗せられた王冠は見た事がある。

現ウエルトゥム国王、アラクト陛下であった。

アラクトは聞き取りづらい発音で難解な貴族語を話した。

貴族語は王の言葉である。主に王からの伝令に使われるが、これはつまり王からの言葉であるという権威を示す為のものでもある。現在では文書の機密を守る為の暗号のように解釈されるが、古来その国の王にのみ許された神の言葉であるとされている。つまり会話にそれを用いる事が許されるのは国王だけ。伝令役は王の口の代わりであった。

時折咳き込みながら細く話すアラクトの姿は、ガンステイルが噂に聞くほどの大食漢とは思えぬまでに小さく見えた。

アラクトはこう言った。『私の部下が失礼をした。君のエルフィン料理を楽しみにしている』と。

ガンスティールはそれに対し当然貴族語は使わず、一切の言葉を出さずにひざまずいて一礼した。一介の下級貴族が王に対して許されるのもまた肯定のみであった。

アラクトはガンスティールの後ろに隠れるユノーを見つけた。

衛兵に支えられながら彼女に近づき、その右の手を取って見た。親指が無いその手を。

アラクトはそれに気付いたようで、ゆっくりとガンスティールに向き直り、また口を開いた。

『おいしそうなエルフィンだ。つまみ食いは許そう』と。

ガンスティールはひざまずいた姿勢からさらに頭を深く下げた。

アラクトは咳き込みながら、その長い髭が揺れるほどに笑った。

それが、この一年間ガンスティールを狂うまでに悩ませた男の姿だった。

アラクトは衛兵に左右を支えられながらゆっくりと部屋を出て行った。

ガンスティールは分かった。あの老体が十一日後にはユノーを食べるのだ。

このまま何も無ければ、確実に。

再会の感動が失せるほど、部屋は重い空気に入れ替わってしまった。

ガンスティールは激情に歯を軋ませる以外できなかった。

それがドミノ・オムニバル・二日前の夜の出来事。

ドミノ・オムニバルに前夜祭は無い。オムニバル自体が盛大な前夜祭だからである。

例年、オムニバルの十日目の夜が明けると、聖屍節と呼ばれる記念祭に移行する。

聖屍節とは歴史上の聖者の屍が年に一度蘇り町を歩くと言われる日である。その日は日の光の当たる場所には出てはいけない。死んだ聖者の屍が一年を通してその節だけ太陽の光を浴びる事が出来るからであり、日の光を浴びたものは聖者の屍と共に墓に連れて行かれるとされる。

そして聖屍節では食べ物がみな死者のための物となる。これも、一年を通してその節だけ屍が物を食べる事が出来るからである。聖者の屍に捧げる為に、オムニバルの間は日の当たるところに食べ残しを放置することになっていた。一説によれば、これは他の宗教にも見られる断食の儀式に理由をつけるものであったそうだ。オムニバルの間に多くの食べ物で腹を満たし、聖屍節の間の空腹をしのぐようになったとも言われる。

夜行と断食は一週間続く。それが明けた日に人々は空腹を満たす為自然と多くの食事をとるので、メインのオムニバルでの暴食と断食明けの暴食をさして『オムニバル・マヨル』『オムニバル・ミノル』と呼ぶこともある。

オムニバル・ミノルは各家庭において規模の違いがあるが、オムニバル・マヨルは国を挙げて暴食を行うものだ。各市町村のメインストリートを巨大な食堂に見立て、金のあるものが材料を出し合っでそこに料理を並べる。そして誰が食べてもかまわない。貧しい者でも最高級の料理が堪能できる祭りだった。またその華やかさを競う為、各地方の領主は私財を投げ出して町に料理を溢れさせる。

ドミノ・オムニバルの前日、王都の城下町は様々な料理の匂いで

溢れている。ガンスティールはユノーとシェンレイを連れて王都のオムニバルを見学していた。王都の町並みはマハエル城下町に似ている。元は領主アラクトのオルパス領であり、アラクト城を中心に八本のメインストリートが放射状に伸びている。メインストリートからは隣のメインストリートに向かって横道が伸びているので、上空から見ればまるで蜘蛛の巣のようであった。

赤煉瓦造りのメインストリートには白いテーブルクロスをかけた大きな食卓が並んでいる。また路上に点々と簡易の屋台が並んでおり、料理人が仕込みに追われている。街中の背の高い住居同士の間には華やかな装飾がかけられている。そして、オムニバルで夜中にも食べ続ける事が出来るようにと一定間隔で街路灯が設置されていた。

この日がオムニバル前日ということもあり、メインストリートには多くの人が溢れている。その中をはぐれないようにガンスティール、ユノーは手を繋いで歩いていった。二人の一步後ろをシェンレイが歩く。これからの十日間、今よりももっとメインストリートには人が集まるのだろう。

ガンスティールはドミノ・オムニバルを楽しむつもりは無かった。だがユノーを連れて逃げる事は出来ないとわかった。それは、宮廷を出て以降周囲に一定の距離を取って数人の監視の目がガンスティールたちを見張っていることでわかった。彼らは食材の身に危険が及ばないようにと保護してくれているようであったが、それは同時にガンスティールが逃げ出すのを阻む事になっていた。王都の駅は他の領地からの観光客が溢れていて身動きも出来ないであろうし、近づけば監視の者に止められるだろう。

ユノーが国王に献上され食われるというのは、避けがたい運命になつてしまったとガンスティールは感じた。諦めたくは無かったが、諦めざるを得ない。

ガンスティールはしばらくメインストリートの屋台を見て回ったが、日が暮れた頃には偶然を装った衛兵に引き止められ、宮廷へと

送られた。

アラクト城は既に老朽化し、象徴としての建造物だけになっていた。そのアラクト城の周囲に新たに作られたのが宮廷である。宮廷の食堂ではアラクトを含むウエルトゥム王国の二十四領主が一堂に会し、晩餐会を開いていた。その中にはもちろんガーベント領主マハエルの姿もある。マキシム領主イサクは遅れるとの事で、今日はその姿が見えなかった。

二十四領主の食卓から一段低い位置に、今回のドミノ・オムニバルのゲストとして呼ばれた各領地のエルフィン農家のための食卓が用意されていた。こちらも席は二十四個。ただし座る者は二十三人である。エルフィン農家の二十三人は今ではお互い見知った仲だ。三週間ずっと同じ部屋に入れられていたのでお互いの名前も知った。彼らの誰もが、自分のエルフィンこそが一番美味しいと豪語していた。そのはずである。彼らが一年間すべてをかけて、そして美味しくなると信じて育てた自慢のエルフィンだったのであるうから。

これから十日間、人々の食に対する狂気を見るのかと思い、ガンステイルは食欲を失った。今宵の晩餐会は国王アラクトが満腹になるまで続いた。

ドミノ・オムニバル一日目、収穫宴。

今日という日を祝福するかのような晴天に見舞われた。

オムニバルは全行程十日間の中で、一日ごとに食材を変える。例えば今日の一日目であれば草食祭。草、葉、根、果実やキノコなどを主に食す。原初の食べ物としてあり続ける植物からの恵みへ感謝を表す為にそれを食す。

晩餐会が夜遅くまで続いたので宮廷の控え室で昼まで寝ていたガンスティールは、宮廷の使用人に起こされてやっと目を覚ました。使用人はガンスティールの部屋の中に料理を運んできたのだった。

ガンスティールは濃厚な匂いを嗅いで、今日がオムニバル一日目であることを思い出した。

使用人によれば、十日間のオムニバル中は宮廷の外には出る事ができないという。それは食に狂乱する民衆で街路が埋め尽くされているからであるが、同時にエルフィン農家の者たちを反アラクト派から保護するという意図もあったようだ。少なくともこの宮廷内は国王アラクトを崇める者しかいないようだった。

ガンスティールは思う。今はアラクトの治世、たった十日で世の中が変わることも無いだろう。ユノーと共に生きるにはどうすればよいのか。

ガンスティールは控え室の中でユノーらと共にオムニバル料理を食べた。ユノーの好きなゴボウの料理もある。ユノーは頑張ってエンジンを食べようとフォークですり潰して細かくしている。「ああ、今この瞬間はこんなにも幸せなのに」ガンスティールはせめてこの光景を目に焼き付けようと、目の前のユノーを見つめる。彼女と目が合う。「ああ」「お父さん、やっぱり私、エンジン嫌いみたい」「いつか食べられるようになるさ」「うん、そうだね」

ガンスティールはこうしてオムニバル一日目を浪費した。

ドミノ・オムニバル二日目、狩猟宴。

獣と同様、人間も肉を食べる。かつての人間は狩りをして獣と戦い、危険を冒しながらもその肉によって生きた。この日は四足獣と猛禽類に扮した民衆によるパレードがある。そしてパレードの行列の最後尾には毛皮を着た人間が歩いて古代人類の狩りを模す。この日食べるのは四足獣と鳥の肉である。

パレードは各領地の城下町でも行われるように、この王都オルパスでも同様に行われる。宮廷ではそのパレードを見学する為、最上階に特設された観覧席に王と領主が集まっていた。

この日、ガンスティールは他の農家の者に会いに、自分の控え室から出て宮廷ロビーに行った。宮廷内は廊下にテーブルが設置されており、常に料理が絶やされる事が無かった。ロビーでは数人の農家の者が談笑しながら肉を立ち食いしていた。

ガンスティールはそこでの話し合いに一日中付き合わされることとなった。夜になっても廊下の食事は絶えることなく、胸焼けするような匂いの中ガンスティールは自室に戻った。

ドミノ・オムニバル三日目、農耕宴。

人は農耕技術を身につける事により安定した食を自給する事が出来るようになった。その古人の知恵と恩恵に感謝し、この日はムギやコメなどの穀物の料理、パンやピラフを食べる。

ガンスティールは昨日の話から、『エルフィン・ハーフ』の研究をしている者が自分に会いたがっていると知った。留置所で知り合った者の一人だ。領主ラッシュのパンゲ領でエルフィン放牧をしているという農家ライムユートである。それは、集まった二十三人の農家の中で唯一の女性であり、男ばかりの留置所内で人一倍それなりの苦労していた者だった。

ガンスティールはライムユートを尋ねるため、彼女の控え室に行った。しかしそこには彼女の執事を名乗る者がいるだけで後は誰も

いなかった。執事の男からライムユートの行方を聞くと、彼女は宮廷の中庭に仮設された飼育所にいるそうだった。もちろんガンステイルはすぐにそこへ向かった。

宮廷の中庭は、アラクト城を取り囲む堀にそって円形に一周するものだった。そこには白くて四角い大きな箱がいくつかがあった。それはどうやらゲスト農家の為のエルフィン飼育所のような。四角い箱は全部で二十四個あったが、うちいくつかはつかわれていない。

ガンステイルは二十四個の箱の中を一つ一つ見て回った。しかしライムユートの姿はない。

改めて中庭を見渡すと、数匹のエルフィンを連れて歩く者がいた。それがライムユートだった。

「お久しぶりです、ライムユート」

「ガンステイル、二、三日前に会ったばかりじゃないか」

ライムユートは春先だというのに厚い毛皮のコートを着て大量に汗をかいていた。体型を隠すその格好と気さくな口調から、留置所では男性用の部屋に他のものと一緒に入れられていたのだった。確かに、領主マハエルのガーベント領の北方に隣接している領主ラッシュのパンゲ領は寒冷な高山地帯である。春でも寒いのだろうがその格好は王都オルパスで見ると気温に対して不釣合いに見える。

ガンステイルが昨日ロビーで話を聞いたことを告げると、彼女はすぐに本題を話した。

「ガーベント領で農家やっているのは、あんただったよな。私の連れ合いがさ、ガーベントで『エルフィン・ハーフ』を日常的に食べっている農家がいるって言うていたんだ。それで、ちょっと話してみたくてさ」

ライムユートは厚いコートと帽子の下から爛々と眼を輝かせてガンステイルに問いかけた。

「なーなー、どんな料理なんだよ。それって、うまいのか」

ライムユートはガンステイルが答えられずにいつにもかかわらず、しつこく訊いてきた。

ガンスティールは、どう答えたものかと思案する。

ふと彼女の連れているエルフィンを見ると、白黒のまだらな地肌の牡エルフィンだった。ただしどれも去勢している。

ガンスティールが満足なエルフィンを誤解したように、彼女も『エルフィン・ハーフ』については何かを誤解しているようだった。

ガンスティールは唐突にオディナ口の言葉を思い出す。オディナ口はかつてガンスティールが食べていた物の事を『エルフィン・ハーフ』と呼んではいなかっただろうか。ガンスティールはもちろん『エルフィン・ハーフ』などという言葉も知らなかったのに何故。ガンスティールはライムユートの質問には後で答えると前置きしてから、訊ねてみた。

「ライムユート、君の連れ合いの名前は」

「ん、オーミイ。それが何か」

「いや、いい」

彼は、もし彼女の連れ合いの名前がオディナ口であったなら恐ろしいと思ったが、そうではないようだった。

ライムユートは思い出したように付け加えて言う。

「よかつたらガーベントの農家に案内するぞってオーミイに言われたんだけどね、そんなとき断ったけど、今こうして会えたからいいかな、なんて。でき、どうなんだよ料理は」

ガンスティールはそれに対し、「真実など知ってもつまらないものだ、私もそうだった」と言っただけで中庭を出た。

部屋に帰る途中、廊下で立ち食いしているユノーを珍しげに見る三人の農家と出会った。

ユノーを含めた四人は、翌日の酩酊宴で出されるはずの酒を既に呑み始めていた。

「ユノー、帰るぞ」

「えっ、まだ食べてる途中なのですけれど」

ユノーはまるでリスのように食べ物でほほを膨らませていた。

「それに、農家の方たちと話してる最中ですし、それが終わったら

ちゃんと部屋に戻ります。いいでしょう、お父さん」

ユノーはそういうと、口の中のを飲み込んでもないのに左手でローストチキンを掴んでいた。前日の余りだが、再加熱されているようである。

威勢の良い食べっぷりに農家の者たちはすっかり感心していた。

ガンステイルは、彼らがユノーをエルフィンだと知らないのではないかと思つたが、「愛嬌のあるエルフィンだねえ」「うらやましいぜ、ガンステイル。こんなに自由奔放なエルフィンは見たとねえ」などと囃し立てたので一応ユノーがエルフィンだということは分かっているらしい。

また彼らの様子から、ユノーの事情をある程度分かっている風にも見えた。ユノーに対して優しく見守っていてくれているようでもあった。

ガンステイルは安心し、彼らにユノーを頼むと言つて自分は部屋に帰つた。自分が見ていない隙にユノーを食うというならば、彼らはガンステイルが中庭でライムユートを探しているうちにもそれが出来たはずであるから。

自室にも運ばれてきた料理を食べていると、泥酔したユノーが帰つてきてそのままベッドに倒れこんだ。

そこでガンステイルは消灯し、三日目を終えることにした。

ドミノ・オムニバル四日目、酩酊宴。

三日間の暴食の小休止として、四日目は酒類を飲む。前三日間に比べれば穏やかな日だった。天候も程よく雲が太陽を隠し、わずかに肌寒い程度だ。

ユノーは前日に農家の男たちと呑み比べをしたといい、朝から既に二日酔い状態になっていた。

ガンスティールが宮廷のロビーに出ると昨日ユノーと話していた三人がロビー備え付けの椅子で寝込んでいた。そつとしておく。

あと六日で亜人宴、エルフィン料理の日になる。このまま運命に流されて良いものかとガンスティールは思う。なんとかユノーに未来を。

ロビーの食卓には野菜料理、肉料理、コメ料理、酒が並んでいる。こうして一日ごとにテーブルに並ぶ品目が増えていくと、どうしてもその最後にユノーが料理として並べられる姿を思い浮かべてしまう。それを避けることは出来ないのだろうか。ガンスティールにいま思いつく術が無かった。

そして、彼は昨日会ったライムユートを思い出す。そうだ、彼女ともっと詳しく話をしていればと悔やんだ。彼はなりふりを構わずライムユートを探す事にした。しかしこの日彼女に会うことは出来なかった。

何の解決の糸口も見つからぬまま、ドミノ・オムニバル四日目が終わった。

ドミノ・オムニバル五日目、トク 蠱毒宴。

人は虫も食べる。害虫、益虫を問わず虫は貴重な蛋白源であるから。人は足りない栄養をどのような形であれ取らねばならない。山間部であればコオロギやイモムシ、沿岸部であればカニやナマコの

ような一見グロテスクなそれでさえ食物として見れば貴重な恩恵である。それらの日用の恩恵へ感謝し、この日は甲殻類などを主に食べる。

天候は昨日よりも雲が増し、宮廷から見える景色も薄暗いと感じるほどだった。しかしメインストリートの熱気は上々、これまでの四日間よりもさらに加熱しているようであった。

ガンスティールは焦った。宮廷内で許された場所の全てを歩き回った。何人かの農家にあつて話を聞くことはできたが、彼が抱える問題の解決が出来そうな情報は無かった。

夜になり五日目も諦めて部屋に帰ろうとしたとき、彼の控え室の前で待つ人影があつた。

「ライムユート」

ガンスティールが昨日探し回っていた女性農家、ライムユートだった。

「話を聞いて、ガンスティール」

彼女は周囲を確認し、ガンスティールを人気の無いところへ誘った。中庭の使用されていないエルフィン飼育所、そのひとつに二人は入った。

彼女は後ろ手に飼育所の入り口を閉ざし、明かりもつけないうまま話を始めた。

「あなたは知っているんだろ、『エルフィン・ハーフ』の作り方。教えてくれないか」

ライムユートは多少興奮していた。それは焦りかもしれない。あと数日で国王にエルフィンを献上しなければならぬのだから。何とか正解を導きだして処罰を免れたいのだろう。その気持ちはガンスティールにもわかった。

だが、今彼女に本当のことを教えれば彼女は絶望しかねない。かつてガンスティールがリトから『満足なエルフィン』の真の姿を教わった時のような困惑と焦燥と悲慨を彼女も受けてしまっただろうとガンスティールは危惧した。

今ここに招待されたゲスト農家の中に、正解にたどり着いた者などどれだけいるだろうか。はたして、正しいエルフィン料理を完成させる事が正解なのだろうかとも彼は思った。

我々は何を望まれているのか、それを知らねばならないとガンステイルは感じた。

しかしそれに気付くのが一年遅かった。

ガンステイルはその後、彼女に『エルフィン・ハーフ』の全てを打ち明けた。彼女から軽蔑はされたが拒絶はされなかった。また、彼女は絶望などしなかった。自信を持って自分の自慢のエルフィンを献上すると言った。

全てを打ち明けたお礼をしたいとライムユートが提言したが、彼はそれを丁重に断り自室に戻った。

そして、残り時間が少ない事を悔やんだ。

ドミノ・オムニバル六日目、母乳宴。

母乳とは、哺乳類が生まれて始めて口にする栄養源だ。母体から切り離されてから自分で食料を得る事が出来るまで、哺乳類は母乳を与えられて育つ。その栄養価に目をつけ、人は動物の母乳を蓄える術を知った。この日はウシ、ヤギの母乳のほかに珍しくエルフィンの母乳も振舞われた。

ガンステイルがエルフィン乳を飲もうとするのをユノーが顔を真っ赤にして怒ったので、この日はユノーをなだめる為に一日中ずっと自室でユノーと食事を楽しんだ。

それはそれで、久しぶりに楽しい一日となった。

ドミノ・オムニバル七日目、大漁宴。

人が肉を得るのは地上からだけではない。ウェルトウム大陸沿岸部では四足獣の肉よりも魚介類の方が身近で、また豊富に取れた。交通機関の発達によりその消費は現在では広範囲にわたる。近年エルフィンの飼料として注目されているのも、魚類の肉である。

この日の空はまるでガンスティールの心情を表すかのように暗雲に包まれ、今にも泣き出しそうであった。ただし、それでも民は食べる。恩恵への感謝を忘れぬ為。

生きるということは食べ続けるということだ。それがいつしか飽食を引き起こしたとして、問題は無いはずだった。

自然界の生態系は、食べる者が増えれば食べられる者が減り、結果食べる者が餓死して食べられる者が再び増える。人間もその大きな流れのひとつだ。繁栄し過ぎれば、滅びる。大きな流れから見れば、種としての人間もわずか一瞬煌めいて消える星の光のようなものなのだろうか。ガンスティールは思った。どんなに永く輝く星も、いずれ消える。それがどんなに短い間でも、同じ。

ガンスティールはユノーの死を受け入れる覚悟をした。

残りの三日間、どれほど上手く立ち回れるか分からないが、ガンスティールはこの饗宴が終わるまでに答えを見つけないと願った。ユノーにとつての幸せとは何かを。

どのような形であれ、ガンスティールは彼女を幸せにしたいと願ってしまったのだ、一年前に。ならば最後まで彼女に付き合うことが自分に課した義務だとガンスティールは思う。

ユノーは死を覚悟している。そしてガンスティールもそれを受け入れると決めた。ならば彼に出来る事はひとつ。

逃げ出さずに、彼女に幸せな死を。

ガンスティールは今まで避けてきた『ドミノ・オムニバル十日目』の調査を始めた。

その調査は、逃げ出す算段をすることに比べて比較的楽に機会を得る事が出来た。

王都オルパスでエルフィン農業を営む男、セージユ。留置所に入られたときに中心人物となり状況の説明を行っていた者だ。彼は歴代オルパスの領主に仕えて宮廷の為のエルフィン肉を供給してきたため、王からの信頼も厚い。恩赦によって留置所から出る事が出来たのもそこに彼がいるからとさえ言われていた。

ガンスティールの頼みを、彼は快く受け入れてくれた。そして九日目には最終日の式次第の写しを渡してくれると約束した。その式次第にはいつものようにエルフィン献上が行われるかが書いているとの事だった。

ガンスティールは彼に感謝し、ゆっくりとその日を終わることが出来た。

ドミノ・オムニバル八日目、討竜宴。

ユーラ地方特産の大トカゲ、通称ドラゴン。その圧倒的な力により、彼らは永きにわたって地上に君臨し続けた。しかし、知恵を身につけた人間にとっては既に飢えを満たす栄養源でしかなかった。

人が自分よりも強い者を食えるということには意味がある。それは知恵により強者を征した証であり、また強者の肉を食らう事でその力を自分の者にしようとする事でもある。

食べる事は、相手を自分の内側に受け入れる事。同化と征服。人は全てを食らう事で生態系の頂点であると自らを誇示した。

この日は大雨に見舞われた。雨は街路灯を消したが、それでも人々は路上で歌い、踊り、食べ続けた。それこそが自らの証であるかのように。

ガンスティールは雨が降る町を眺めながら、ユノーと共にドラゴンの肉を食べていた。

ドラゴンの頭の丸焼きが部屋に運ばれたとき、ユノーはじつとそれを見ていた。珍しいのかもしれないと思ったが、どうやら別に思うところがあったようだった。

「お父さん。これ、ドラゴンの牙でしょうか」

ユノーはドレスの胸の谷間から首飾りを取り出した。そして目の前のドラゴンのそれと比べて、形が同じである事を示した。

「ユノー、それはそこで手に入れたんだい」

ガンスティールは見覚えのあるその出所を訊いた。まさかユノーがドラゴンを倒した事も無いだろうし、誰かから貰ったのだろうか。

「これは、オディナロさんがくれたものですよ」

ユノーはあれこれ思案し「たしかに、そうです」と言った。

オディナロ。ガンスティールを裏切り秘密警察として彼を監視し

ていた人物。そして彼をこのオルパスまで連れてきた人物であった。またその首飾りはガンスティールがかつて友情の証としてオディナ口に渡した物のはずだった。

これをユノーに渡すとは、どういうことだろうか。ガンスティールはその意味を考えた。友情と決別するという意味か。どうあれ、今のガンスティールにとっては見たくもない物だった。

そして夜、ユノーが寝たのを確認してガンスティールは部屋を出た。

というのも、彼の給仕シェンレイが先に部屋を出て行ったからだった。

ガンスティールは不審に思う。シェンレイは一体何をしに行ったのか。

宮廷の中は真夜中であっても足元が見える程度に明かりがついていた。オムニバル中は昼夜を問わず飲食が出来る事になっていたらだ。おかげでガンスティールの服にもすっかり服に匂いが染み付いている。彼にとってはまるで自分が料理にでもなった気分だった。シェンレイがどこに行ったのかガンスティールには分からなかったが、とりあえず宮廷内を探索するには一度ロビーに出なければならぬ。

ロビーでは三人のゲスト農家が巨大なドラゴンの丸焼きと格闘していた。格闘、と言っても苦勞しながら食べる事ではない。既に動かなくなっているドラゴンを相手に、食事用ナイフを剣に見立てて大げさな演技をしていた。

そのように盛り上がっているところを他人に見られたら恥ずかしいだろうと思い、ガンスティールは彼らの視界に入らぬようそっとロビーを通過した。

シェンレイがどこにいるかは分からないが、もし誰かと会うのであれば中庭だろうと彼は思った。そして中庭へ抜ける為に作られた石の回廊を中ほどまで歩いたところで、ふと足を止めた。

わざわざ逢引きを見に行くものでもない、そう思い彼は引き返そ

うとした。その時、彼が今行こうとしていた中庭の方から足音が響いた。

ガンスティールはその場を見回したが隠れる場所も無く、どうしたものかとも思ったが宮廷ロビーへ引き返す事にした。

ロビーでは先ほどと変わらず演劇口調の声がある。先ほどと違うのは、料理を運んできたのである。宮廷使用人が演劇に参加させられていることだ。なるほどあの時見つかったらこれに参加する事になったのかとガンスティールは思い、彼らに見つからぬように姿勢を低くして自室に戻り、その日は寝た。シエンレイは帰ってこなかった。

### ドミノ・オムニバル九日目、製菓宴。

人は味覚を楽しませる為に料理を研究し、その最たる物として菓子を作った。それは栄養価を求める物というよりも味覚、視覚、食感において人を楽しませる為にある。

料理、つまり食品の加工技術の起源として殺菌の為の加熱や腐敗臭を消す為の香辛料などがある。しかし、食を娯楽に変容させるのに大きな役割を果たしたのはやはり製菓であった。

人間の食文化の進歩を讃えて、この日は多種多様の菓子を食べる。これでオムニバルの食卓は全て出揃った。後はこれらの料理を食べながら、最終日の亜人祭、エルフィン食いを成功させるだけとなる。

この製菓宴では、オムニバル開催地のどこでも必ず民衆全員に配られる菓子がある。それは人の形をしたジンジャー・クッキーだ。このジンジャー・クッキーの起源は諸説ある。オムニバル直後に復活するとされている聖人たちを象徴したという説、人肉を禁じられてからその代わりとしてつくったという説、翌日の亜人宴のためのエルフィンが買えない貧しい人々が代わりに食べるようにとする説。諸説はどうあれ、このクッキーはオムニバルのシンボルとしても知られていた。

この日、空は見事に晴れ上がっていた。昨夜は雨が降ったようで、控え室から見える街中では民衆の子どもたちが水溜りで遊んでいた。ガンスティールは、ジンジャー・クツキーを食べ終えたユノーにせがまれて宮廷ロビーへ行く事になった。ロビーではゲスト農家のために毎日絶やさず料理で溢れていたためだ。そしてこの九日間でユノーは友達を作ったらしい。ロビーに必ずいる三人の農家のことだろうとガンスティールは理解した。

ロビーでは、いつもどおりのゲスト農家三人が疲れ果てて寝ていた。昨晚遅くまで演劇じみた事をしていたのだろうとガンスティールは推測する。その三人のほかにも疲れ果てた者が周囲のソファアーに寝ていたからだ。

ガンスティールはその中にシェンレイを発見した。昨夜帰ってこなかったのはこの三人に捕まったからだとよく分かった。

ユノーはまるで死屍累々の様相を呈したロビーの中央にあるケーキ・バイキングが気に入ったようで、「しばらくロビーにいる」と言いケーキを食べ始めた。

ガンスティールはシェンレイを自室まで運ぶ事にする。すると一人の男がソファアーから起き上がって彼にこう言った。「手伝いましょう、ガンスティール」それはオルパスの農家セージユだった。

セージユは多少足元がおぼつかなかったが、シェンレイを支えてガンスティールの控え室まで付き添った。

「ありがとう、助かった」

そうガンスティールが彼に礼を言うと、少しうつむいて照れくさそうな表情を浮かべてから彼はこう言った。持ち上げた顔は真剣そのものであった。

「ガンスティール、ここだけの話として聞いてくれ」一段階ほど声を潜めてセージユはこう続けた「一緒にこの狂った世界から抜け出さないか」と。

ガンスティールは目の前の男の真意を測りかねた。彼はこの王都で、国王アラクトからの信頼も厚い農業貴族のはず。この世界から

抜け出すとはどういう意味を持つのかわからない。

「すでにこの宮殿は神聖帝国サージェスに掌握されている。あとはアラクトさえ引き降ろす事が出来ればこのウエルトウムは変わる。ガンステイルにも分かるだろう、エルフィンに食用とされるだけの価値はない。それどころか、その優れた知性を有効に活用すればこの世界はよりよい発展が出来るはずなんだ」

セージユは自己陶醉したかのように熱く語る。その様子にガンステイルは辟易し、またこう思った。「街談巷説のたぐいはもうたぐさんだ」と。

そのことをセージユにそのまま伝えると、彼はひどく落胆させられたようだった。

セージユは控え室を出る前にこう言い残していった。

「ガンステイル、君はエルフィンとあれほど心を通わせている。

我々は君に是非、この国の新しい王に就いて欲しいと皆願っている」

決意を宿した声であった。

## 第9話 狂宴 9 - 1

### 第9話 狂宴

ドミノ・オムニバル十日目、亜人宴。

人はかつて共食いにより自滅の危機に瀕した。それを救ったのが亜人エルフィンだった。

古代人類とエルフィンは契約を結んだ。人がエルフィンを守り、エルフィンが肉を提供するという共生関係である。

人より優れた知恵を持ちながらそれを封じ食肉となった彼らに感謝する為に、この日人々は盛大にエルフィンを食う。

雲ひとつ無い青空が紅い夕日に染まり、やがて満天の星空を迎える頃。

夜の闇を打ち消すかのような無数の松明の灯火が、煉瓦の町並みを朱く染める。

十日にも及ぶ祭典を経てなお、人々の熱気は冷め遣らない。むしろ日に増して加熱する勢いであった。

ドミノ・オムニバル。聖・狂食祭と名付けられたこの祝祭も十日目を迎えてやつとメインイベントへと運ばれることとなった。

この時ばかりは王都オルパスの宮廷は民衆にも開かれる。正門から宮廷までの前庭は熱狂する人々で溢れた。ただし、その興奮を胸の内に秘めて静かに庭園を満たす。

庭園に招かれた人々は皆、テーブルいっぱい盛り付けられた料理を眺めたまま静かに垂涎している。誰もが、今にも肉に飛び付かんばかりの勢いを抑えながら開式の辞を待っているのだ。

やがて宮廷のバルコニーに男が現れた。大いなる権力者であろうことは、そのいかにも荘厳な佇まいからも想像に難くない。誰もが知る現国王、アラクトである。

国王は民衆がよく見える位置へとさらに一步前に出た。それはつまり民衆からも彼の姿がよく見えるということでもある。

その異様な姿に、人々は神妙な面持ちでそれを凝視する。小柄でありながら丸々と太ったその姿はまるで強制的に太らされた食用エルフィンの様でもある。

街路の熱狂とは対照的に静まりかえる庭園を見下ろして、国王は唐突に口を開いた。

国王の声が響く中、民衆はそれに耳を傾ける。

国王にのみ許された貴族語による開会の辞。エルフィンとの契約を守り今まで繁栄してきた人とエルフィンの歴史を独特なイントネーションで語る。

それは辺境で略式に語られる演説と違い、まるで一つの長い歌の様であった。小柄の老人の口から紡ぎ出される声は、あるメロディを完成させていた。日常の場面において国王が語る言葉や伝令役などが読み上げる貴族語は、全てこの長い歌から単語を拾い上げて作られた断片的なツギハギでしかない。この貴族語はこの歌の中で初めて完全な形となる。

アラクトが唄い終わると、それが開会の合図であった。

先ほどの歌の余韻に浸りながら、人々は庭園に用意されたエルフィン料理を食べ始める。もちろんすでに加工されたエルフィン肉であり、エルフィンの鳴き声など聞こえるはずも無かった。

アラクトはその様子をしばらく眺めてから宮廷の中に戻った。

宮廷の中ではアラクト聖誕の記念式典が始まろうとしている。

ドミノ・オムニバル前日に行われた晩餐会でも使用された食堂にガンスティールはいた。彼の隣にはシェンレイが控えているが、ユノーはそこにいない。国王に献上する料理としての下ごしらえを受けていることだろう。ガンスティールとユノーの別れは実にあっけないものだった。ガンスティールがまだ寝ている間にユノーは連れて行かれた。次にユノーがガンスティールに会うのはきっと食卓の上の料理としてだろうと彼は思った。

アラクト王の誕生を祝う式典は、あからさまに異常だった。

アラクト王を除く二十三人の領主たちが無言で見守る中、アラクト王もまた終始無言でテーブルに盛られた料理を食べ続けている。

果実を食べ、肉を食べ、穀物を食べ、酒を飲み、虫を食べ、羊の乳を飲み、魚を食べ、トカゲを食べている。

これから起こることを誰も知らないだろうし、誰も知っているのかもしれない。

常人にはありえないほどの料理を次々と食べていくアラクト王は、もしかしたら全身に料理を詰め込んでいるのかもしれないと思わせる姿だった。

やがて料理人が現れた。その場にいる者の殆どが知らない事であり、知る必要も無い事だが、その男こそが神聖帝国サージエスの宮廷料理人キーン・ヴァイオンである。

領主たちが困む輪状の食卓の中央に料理台があり、料理人は今日の為に集められたエルフィンたちを引き連れてそこへ行った。

どうやら、国王の前で料理を試みせるつもりのように見える。

料理人が引き連れるエルフィンの群れの中に、ユノーの姿もあった。ユノーがまだ生きていることにガンスティールは僅かな安堵を覚えた。

料理人が調理道具の用意をしている間に、使用人たちが今日の亜人宴で民衆に振舞ったのと同様のエルフィン料理を運んできた。ゲストの農家に振舞う為のようだ。

それらは大層豪華なエルフィン料理だと言えよう。生きたまま切り身にされているものや、手足をもぎ取られ揚げ物にされているものなど、人間の死体を連想させるものばかりだった。

『早く、食べて』

ガンスティールの脳裏には、先ほどから死に掛けのエルフィンたちの叫びが聞こえ続けていた。それらはすべて、喜んで人間に食べられようという彼らの願いであった。

これから起きる事をガンスティールはひしひしと感じていた。その出来事を中心にどうやら自分がいるらしいとも感じていた。そして、そこにある狂気が最高潮に達する時が来た。

初めに動いたのは、王都のエルフィン農家セージュだった。彼はおもむろに席を立ち、調理道具の準備を終えた料理人キーンのもとに近づいた。その動作を止める者はいない。

セージュはアラクト王に向き直り、調理台を指して言った。

「古き人間の王よ、準備は整った。古代の契約はこの日をもって終わりでしょう。この調理台に乗るがいい。今宵のメインディッシュは貴方だ」

この王国のしきたりとして、王の地位と権力は先代の王の肉を新しい王が食することで引き継がれることになっている。

ここでアラクト王の肉をこの場にいる者で分け合えば、王という古い制度は終わることになる。

だがアラクト王はまるで聞く耳を持たず、目の前の料理を次々と食べ続けていた。

「強欲な化け物め、貴方の時代はもう終わったのだ」

セージュは苛ついた様子で、アラクト王を無理やりにも調理台に連れて行こうと彼の食卓に近づいた。

そしてアラクト王の王冠を奪おうと手を伸ばした。

「さあ、その王冠を捨て」

セージュが伸ばした手をアラクト王が掴んだ。とても老人とは思えない俊敏な動作であった。そして、その手首から先を噛み千切り、噛み砕いた。セージュが痛みに気づいたときには彼の手はすでに飲み込まれていた。

悲鳴を上げる間も無くセージュは王の食卓に引きずり上げられ、まるで木の葉が滝壺に飲み込まれるようにセージュはアラクト王に食べられていった。

アラクト王はすでに食欲だけの存在になっていると誰もが察した。

しかし誰も動くことが出来なかった。

肩まで食べられたところでセージユは食卓から転げ落ちた。血が噴き出す傷口を押さえながら彼は笑っていた。そして叫ぶように呪いの言葉をあげた。

「良い。良いぞ。この狂った世界の終わりに相応しい」

セージユは苦痛に悶えながらも満足げだった。彼は傷口から大量に血を流し、やがてその場で動かなくなった。

狂気の宴は続く。

セージユの失敗を見て、宮廷料理人キーンはその場にいたエルフィン調理し始めた。もしアラクト王の食卓が空になれば王は手当たり次第に物を食べ始めるだろうと彼は察知したのだった。

キーン調理台に集められたエルフィンたちは恐れる様子も無く彼に腹を割かれ、肉を刻まれていった。

まず、数頭のエルフィンが料理と化した。

それさえもアラクト王は食い散らかした。

すると、食材の群れから一頭のエルフィンが飛び出した。ユノーだった。

「王様、次の料理は私です。どこからでも好きなところからお食べください」

ユノーはそう言う到着していた服を脱ぎ捨てた。褐色の肌、白い髪、紅い目をすべてアラクトに向ける。

エルフィンが言葉を話している事にアラクトはまるで驚きもしなかった。そしてアラクトは目の前のテーブルを押しつけ、ユノーに手を伸ばした。

ユノーは毅然とただそこに立っている。ガンステイルには止める間も無い事だった

しかしそれを止めた者がいた。

宮廷の衛兵たちの間から姿を現したのは、ガンステイルにとっで見覚えのある男、オディナ口だった。

「恐れ多くもウェルトウム国王陛下であらせられるアラクト王に進言いたします、そのエルフィンは一月ほど前に病に冒された物。国王陛下、そのエルフィンを食べてはいけません」

壇上にどよめきが走る。オディナ口はユノーを壇上から降ろそうとその手を引く。

「何をいまさら。ここまできて止めないでください」ユノーがオデイナ口の手を振り払う。

「国王陛下、そのエルフィンには毒です。衛兵、このエルフィンを捕らえる」オデイナ口は周囲の衛兵を呼んだ。衛兵たちは『食欲の怪物からエルフィン少女を保護する為』にユノーを取り囲んだ。すでにこの場にいるものはすべてアラクト王を王位から退けようと思っただけであった。

しかしユノーは動こうとしない。

ユノーは再び両手を広げて食べられる時を待つ。

しかし彼はユノーを食べることなく席に戻った。

『食欲をなくした、もう良い。下がれ』

アラクトは興味を失ったように手を振った。

「王様、どうしてですか。私はこの一年間ただ食べられる為だけに生きたのに」

ユノーは叫んだがアラクトは聞かなかった。

そこでユノーは衛兵の腰に提げられた小剣を奪い、王の足元に走り寄る。衛兵がそれに気付いて止める間もなく、ユノーは自分の腹を縦に引き裂いた。

「ほら、これが私の全て。『満足なエルフィン』です、どうか」

ユノーは縦に裂かれた傷跡から自分の臓物を取り出して言った。血液と汚物の悪臭が壇上に流れた。

痛みにユノーは、体液で顔を汚しながらも懇願した。

それでも王は顔を背ける。

ユノーは腹腔から内容物をこぼしながら衛兵に引きずられ、ガンステイルのもとにたどり着いた。

「ユノー」

ガンステイルの問いかけに、ユノーは虚ろな目を向けて応えた。  
「お父さん」

ユノーは横隔膜より下の器官のほとんどを失い、それでもガンステイルに言った。

「ごめんね」

ぼつりと言った言葉はガンスティールの心をえぐった。

「お父さん、がんばったのにね」

ユノーは既に視力を失っているようで、虚空を見つめて彼女は言った。

「しょうがないから、私の肉はお父さんが食べてね」

声は少しずつ弱まる。延命できない状態であった。

「そうすれば私はお父さんの血と肉になって、いつまでも一緒にいられるから」

ガンスティールはユノーの手を強く握り、応える。

「わかった。これからはずっと一緒だ、ユノー」

ガンスティールの応えが彼女の耳に届いたかは分からない。ガンスティールが素晴らしい終わる前に力を失ったのだった。

しかし、きつと彼女にその言葉は届いたことだろう。

ガンスティールは立ち上がった。彼は自分が何をすべきか分かっていた。

彼は大きく息を吸い込み、空気を震わせて歌を歌い始めた。

子守唄のようなメロディー。それに乗せられるのは禁じられた貴族語での返歌だ。

貴族語の演説とはつまり、古代人類と古代亜人類が交わした契約の歌。それに対して返歌は契約が満了する事を意味する。

歌声は宮廷の外の庭園まで響いていた。

『ありがとう、人間たち。私たちは感謝している。今まではあなたにつき従い命を紡いできた。これからは共に生きよう。共に歩こう。共に互いの肉を食らおう』

ガンスティールは、脳裏に響く歌声に合わせて歌っていた。それはもしかしたら、この国に生まれたすべてのエルフィンの総意であったかもしれない。

その場にいた食材用のエルフィンたちは彼に合わせて歌い始める。

庭園の民衆は亜人の肉を食するのも忘れてエルフィンの歌に聞き入っていた。

やがて、歌声は新たな幻想と狂気を生み出していった。

食材用ではなく、すでに料理となったはずのエルフィンたちさえも、その歌に合唱を始めたのだ。

濃厚なスープに浸かりながら、煮崩れたエルフィンが鍋の底から歌いだす。

切り身になったエルフィンが皿の中から立ち上がり歌う。

その情景はまるで、聖屍節に聖者が蘇るといふ伝承がいつ亡者の宴そのものである。

懸命に歌うガンステイルの足元で、何かがゆっくりと立ち上がった。

ユノーの屍までもがその合唱に参加してきたのだった。

庭園からは人間たちの悲鳴が聞こえた。この場所からは見えなかったが、蘇る料理たちに驚いていることだろう。

歌が続く中で、蘇ったエルフィンのいくつかがアラクト王に飛び掛った。

あまりの出来事に呆然としていたアラクト王はあっけなくキーンの調理台に運ばれた。

「よく、ここまで肥えたものだ」

キーンは湾曲した包丁をアラクト王の腹にあてがう。

『何をするつもりだ』

狼狽するアラクト王だが、両手と両足を屍のエルフィンに押さえつけられて身動きすらとれずにいる。

「何を、ですか。しいて言うならば、これは『革命』ですよ。聞こえていたでしょう。もう、人間がエルフィンを食べるだけの時代は終わったのですよ」

獐猛な笑みを浮かべてキーンは言った。彼の両耳は人間のように短く丸いものだったが、彼がどちら側なのかは誰も知らない。

あてがった包丁で、彼はアラクト王の腹を下から上へ縦に割いた。

たったそれだけのことで、アラクト王は豪華な一品料理と化した。やはり彼の体の中には隅々まで多種多様な料理が詰まっていたのだ。二十三人の領主たちはようやく席を立ち、かつて王だった者の肉を切り分けて食べ始めた。

それをきっかけにして、次第にそこかしこから、人間のものともエルフィンのもものともつかない鳴き声が上がった。

人間もエルフィンも対等に、互いが互いを食べ始めたのだろう。

亜人宴は大いに盛り上がった。人間の前には良く肥えた亜人。亜人の前には良く肥えた人間がいたのだから。

「ねえ、お父さん」

唄い終えたユノーが、ガンスティールを見上げてにこりと笑った。「なんだい、ユノー」

宮廷に満たされた食事の音にまぎれないように、ガンスティールは大きめの声で応えた。

「わたしね、お父さんに食べてもらいたいの。きつとおいしいよ」「ああ、そうだろうね」

ガンスティールはユノーの右手に軽く口付けをした。

そのしなやかな指先から美味しく頂くことにした。

ガンスティールがその場で食べた彼女の指は、以前食べたときよりもさらに美味であった。

彼女は幸せの味に違いないとガンスティールは強く思った。

## 最終話 血肉

### 最終話 血肉

ガンスティールが宮廷を出たときには、既に夜が明けていた。東方から赤い光が静寂と化した街を照らしていた。

「ガンスティール、外国に渡りたくなったら俺に連絡をくれ。すぐに工面してやる」

宮廷正門の下、日傘を差したオディナロだけがガンスティールを見送った。

「ありがとう、オディナロ。でも私はこの国の行く末をしばらく見守っていくつもりだ」

オディナロは今もガンスティールの親友のままだった。ガンスティールとユノーの親子関係をうらやましく思い、あえて国外追放させる手立てを考えていたという。彼自身も秘密警察に監視されていた為ガンスティールのために動けることは少なかったが。

「シェンレイの具合はどうだ」

「あの子は俺と一緒に宮廷に残る事になった。聖屍節の間は交通機関も動かないからな。その間に休養させてからガンスティールの屋敷に送るつもりだ」

オディナロとシェンレイはいつの間にか仲が良くなった様で、倒れたシェンレイは彼が介抱していた。オディナロによるとシェンレイは、自ら腹を割いたユノーを見て気を失ってから未だ目が覚めていないそうだ。オムニバル八日目の夜に中庭にいたのはきつとこの二人なのだろうとガンスティールは思った。

「じゃあな、ガンスティール」

「ああ。後の事はよろしく頼む」

ガンスティールは、生きている者が浴びてはいけなはずであっ

た聖屍節の朝日をその身に受けながら、宮廷を背に歩き出した。

「お前は、どこに行くつもりなんだ」

オディナロの声が街に響いたが、ガンスティールは答えなかった。メインストリートは先日までの喧騒を忘れ、全く静まり返っていた。

路上には食べ残しが散乱し腐敗している。かつて生命だった物の姿だった。草も木も鳥も獣も虫も蜥蜴も亜人も人も、全て生きているから他の生命を食べ、そして生きている。食べられて死んでいく。こうして姿を変え、その屍でガンスティールが歩く道を埋めている。

ガンスティールはその屍の道を踏みしめ、歩いていった。

彼がどこへ行くのかは誰にも分からない。だがこれだけは言える。彼がどこへ行こうと、それは彼の中のユノーと共に。

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7059t/>

---

満足なエルフィン

2011年6月18日18時25分発行